Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-08

関係の価値がコストのかかる謝罪へ及ぼす影響の検討

八木，彩乃

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2017-03-25
(Date of Publication)
2018-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6799号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006799

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博 士 論 文

平成 28 年 12 月 9 日

関係の価値がコストのかかる謝罪へ及ぼす影響の検討

神戸大学大学院人文学研究科博士課程
後期課程社会動態専攻

八 木　彩 乃

1 序論……1
1.1 本研究の背景……1
1.2 謝罪……1
1.3 コストのかかっている謝罪……3
1.4 関係価値仮説と謝罪，許し……5
1.5 仮説と共変数……5
1.6 研究の概要……6
2 研究 1……8
2.1 目的……8
2.2 方法……8
2.2.1 参加者と実験デザイン……8
2.2.2 手続きと質問項目……9
2.3 結果……10
2.3.1 仮説の検証……10
2.3.2 補足的分析……12
3 研究 2……14
3.1 目的……14
3.2 方法……14
3.2.1 参加者と実験デザイン……14
3.2.2 手続きと質問項目……15
3.3 結果……16
4 研究 3……20
4.1 目的……20
4.2 方法……20
4.2.1 参加者と調査デザイン……20
4.2.2 手続きと質問項目……20
4.3 結果……21
4.3.1 被害者との関係……21
4.3.2 仮説の検証……22
4.3.3 補足的分析……23
5 研究 4……25
5.1 目的……25
5.2 方法……25
5.2.1 参加者と調査デザイン，手続き，質問項目……25
5.3 結果……25
5.4 考察……28

6　研究5……29
6.1　目的……29
6.2　方法……29
6.2.1 参加者と調査デザイン……29
6.2.2 手続きと質問項目……30
6.3　結果……31
6.4　考察……32
7　研究6……34
7.1　目的……34
7.2　方法……34
7.2.1 参加者……34
7.2.2 調査デザイン・質問項目……35
7.3　結果……37
7.3.1 被害者との関係……37
7.3.2 相手の感情……37
7.3.3 仮説の検証……37
7.3.4 補足的分析……42
8　総合考察……44
8.1　本研究の限界……44
8.2　まとめ……45
9　参考文献……47

付録

I.　付録 a　研究1から研究6までの，全変数についての，平均値，標準偏差，信頼性係数および相関係数の表……54
II.　付録 b　研究1～5で用いた質問紙および研究6で用いた質問項目……62

謝辞……93

1. 序論

1.1. 本研究の背景

親しい間柄でさえ，時に対人間葛藤が生じることは避けられない。幸運なことに，そういった葛藤の多くは，平和的に解決する。De Waal（2000）は，霊長類間での葛藤解決を観察し，価値のあるパートナーとの仲直りが促されている，と報告している。このような関係の価値がその関係の修復を促すという現象について，de Waal は関係価値仮説（valuable relationships hypothesis）と名付けている。この関係価値仮説を支持する多くの知見は，葛藤が発生した個体間の葛藤後の接近傾向を体系立てて観察したものに基づいている（de Waal & Pokorny, 2005）。これらの知見では，偶発的な葛藤状況のあと，それが価値あるパートナー同士の間で起こった場合には，価値が低いパートナー同士の場合よりも，互いに迅速に仲直りする傾向にあることが示されている。

この関係価値仮説は近年，ヒトにまで拡張され（McCullough, 2008），経験的な支持が得られている（Burnette, McCullough, Van Tongeren, & Davis, 2012; McCullough, Luna, Berry, Tabak, & Bono, 2010; Verbeek & de Waal, 2001）。しかしながら，ヒトについての多くの知見は，被害者は加害者が価値あるパートナーであるときに相手を許す傾向にあるという，被害者側に焦点を置いたものである（McCullough, Kurzban, & Tabak, 2013）。そこで本研究では，関係価値仮説について，加害者側の知見をえることを目的とする。

1.2. 謝罪

仲直りのために加害者がとる手段の中で，ヒトにとってもっとも一般的な形式は，おそらく謝罪（apology）だろう。謝罪とは，友人や恋人といった身近な人々との関係を継続するために，その人たちとの間で起こった社会的な違反状態から正常な状態へ復帰するメカニズムを示す（Goffman, 1967; Tavuchis, 1991）。関係の回復の決め手となるのは，被害者からの許しであるが，くわえて加害者側の行動としての謝罪と被害者側の許しの間には因果関係があると先行研究で示されており（Hodgins & Liebeskind, 2003; McCullough, Worthington, & Rachal, 1997; Zechmeister, Garcia, Romero, & Vas, 2004），

謝罪を申し出た者は，謝罪しなかった者よりも許される傾向にあることが明らかになっている（Darby & Schlenker, 1982; Exline & Baumeister, 2000; Fehr, Gelfand, & Nag, 2010; Hodgins & Liebeskind, 2003; Ohbuchi, Kameda, & Agarie, 1989）。このように，加害者側が行う謝罪は，二者間の関係を修復するための重要な要因となっている。

謝罪が許しを導くプロセスについては，二つのメカニズムで説明されている。ひとつは共感モデル（empathy model）であり，もうひとつは帰属モデル（attribution model）である。共感モデルでは，加害者からの謝罪が被害者から加害者に対する共感的な関心を促進するために，被害者の許しへのモチベーションが高まる，と考えられている（McCullough, Fincham, & Tsang, 2003; McCullough et al., 1997）。一方で，帰属モデルでは，加害者からの謝罪によって，被害者は加害者が再び違反行為を起こさないだろうと認識し易くなる，つまり違反行為に関する行動の安定性の帰属（attributions of behavioral stability）が減少するために，許しへのモチベーションが高まると考えられている（Gold & Davis, 2005; Gold & Weiner, 2000; Takaku, 2001; Weiner, Graham, Peter, & Zmuidinas, 1991）。Davis & Gold（2011）はこれら 2 つのモデルの統合を，回想法を用いた質問紙調査により試みている。調査の結果，謝罪によって明らかになる行動の安定性の帰属が相手への共感を部分的に導き，許しへと繋がることが示唆されている。これは，謝罪と許しの間にあるプロセスを明らかにする，注目すべき知見のひとつである。

くわえて，これまでの謝罪研究では，表面的な謝罪よりも真正の謝罪が，相手からの許しを導きやすいことが示されている（Anderson, Linden, & Habra, 2006）。ここでいう真正の謝罪とは，悔恨の表現を伴うものがあげられる（Bornstein, Lahana, & Miller, 2002; Ohbuchi & Sato, 1994; Schmitt, Gollwitzer, Forster, & Montada, 2004）。もし，ただ「ごめん」と言いさえすれば許してもらえるのならば，反省する気のない加害者はこぞって口だけの謝罪を行うだろう。しかし，加害者の行ったそれが上っ面の謝罪（Bottom, Gibson, Daniels, & Murnighan, 2002），つまり不誠実な謝罪であると知覚された場合には，むしろ被害者の怒りは火に油を注がれた状態となる（Skarlicki, Folger, & Gee, 2004; Zechmeister et al., 2004）。このように，謝罪は謝罪することそ

のものだけで有効なのではなく，そこに含まれる誠実さや，本当に後悔しているかどうかが重要なのである。

では，表面的な謝罪と真正の謝罪を，被害者はどの様に見分けているのだろうか。あるいは，心から関係の回復を望み，謝罪をしたいと考えている加害者は，不誠実な加害者でないことをどうやって被害者に信じさせることができるのだろうか。この問題について，Ohtsubo & Watanabe（2009）は，謝罪にコストがかかっているかどうかが重要であると論じている。

1.3. コストのかかっている謝罪

Ohtsubo & Watanabe (2009) は，コストリーシグナリング理論 (Bliege Bird & Smith, 2005; Henrich, 2009; Zahavi & Zahavi, 1997）を用い，真に後悔している加害者がコストのかかったやり方で謝罪を行うのであれば，その謝罪は信用されると主張している。コストリーシグナリング理論とは，行動の意図が正直なものであるか否かを判断する方法が必要なとき，つまり誠実な者／不誠実な者が入り混じる中で，不誠実な者が誠実さを装うことで利益を得るような状況に対し，これを解決する手段として，コストリーシグナルが進化してきたと論じている（Zahavi & Zahavi, 1997; 大貫訳, 2001)。

コストリーシグナリング理論では，コストのかかったシグナルはその正直さが保証されることを提言しており，自然界において一見その個体にとって不利に見える様な行動や現象が実は利にかなっていることを説明している。例えば，ガゼルは偶蹄目に属する草食動物で，サバンナなどに生息している。彼らは捕食者が自分たちの群れを狙っていることに気付いたとき，その捕食者に対して背を向け高く縦に飛び跳ねるストッティングという行動をとる。捕食者に対して自分をアピールすればその分注目される。また，ストッティングによって逃走するための体力を消耗するため，個体が生き残るには一見，不利な行動のように思える。しかし Zahavi & Zahavi（1997）は，コストリーシグナルの観点から解釈すると，ストッティングは個体の生存に適応した行動だと論じている。それを説明するロジックを以下に示す。捕食者は食料を捕獲するために消費する体力を最小限に抑えようとするため，体力のないガゼルを狙おうとする。体

力を消費するストッティングを行うガゼルは，ストッティングを行った上でさらにまだ逃走する体力のある個体であり，捕まえるには相当の労力を要することになるだろうと捕食者は判断する。したがってストッティングを行うガゼルは捕食者に狙われないようになり，生存しやすくなるのである。ここで捕食者にとって重要なのは，そのシグナルが本当に逃走しとおせるようなガゼルによって発信されているのかどうかである。もしストッティングが体力の少ないガゼルでも行うことができるものであるならば，捕食者に狙われないと言う利益のために，体力のないガゼルでもストッティングをし，体力があるというシグナルを発しようとするだろう。この場合，ストッティングというシグナルは正直なものではなくなる――すなわち，ストッティングをするガゼルは常に体力がある，ということを意味しなくなる。そうであれば，捕食者はストッティングをするガゼルを狙わないという行動をとらなくなり，ストッティングをし，シグナルを送ることによるガゼルの利益はなくなってしまう。このような不正直なシグナルを排除するために，体力のあるガゼルはストッティングを高く力強く行い，体力のないガゼルが真似できないようにする。体力のないガゼルはそれほど素晴らしいストッティングを行えず，仮に行ったとしても不格好なものとなり，かえって体力のなさを露呈することになる。よって，体力のないガゼルにとっては，負担の大きすぎるコストをかけてシグナルを発するよりも，ストッティングを行わず，体力を温存しておいた方が自身の生存率を上げることにつながる。このように，一見，適応度を下げるような，過剰にコストのかかったシグナルは，そのコストを支払う能力がない不誠実な者がシグナルを送ることをしりぞけることができる。このため，送信者／受信者共にその正直さが保証されるようになる。

Ohtsubo & Watanabe (2009) は，コストリーシグナリング理論にもとづき，真に仲直りをしたい加害者は，意図の誠実さを示すために，謝罪やそれに類する融和行動にコストをかけると論じている。そのようなコストのかかっている融和行動の中で，被害者の許しを導くのに効果的だと知られている一般的な形式は，補償である（e.g., De Cremer, 2010; Desmet, De Cremer, & van Dijk, 2010, 2011; Fehr & Gelfand, 2010; Schweitzer, Hershey, & Bradlow, 2006）。もし補償のコストが充分に大きければ，搾取によって得られた利益は帳消しに

なる。よって，搾取による利益を求める者は，このようなコストのかかった謝罪をしないだろう（Exline, Deshea, & Holeman, 2007）。しかし，補償は被害者の損失を補い公平な状態に戻すから有効なのだ，という別の説明も可能である（Darley & Pittman, 2003）。これについては，Ohtsubo & Watanabe（2009，研究 2 と 3）で，加害者が謝罪にかけたコストが被害者に渡らない一方的なものだとしても（例えば，加害者にとって重要な約束をキャンセルする），その謝罪は誠実さを示すものとして有効であることが明らかになっている（Ohtsubo et al., 2012）。以上から，加害者がどのくらい真に仲直りをしたいと考えているかを従属変数にとる際には，謝罪にどの程度のコストをかけても良いと考えるか，あるいはどれくらいコストのかかる融和行動をとったか，で測定することが可能である。

1.4. 関係価値仮説と許し，謝罪

先述の通り，ヒトにおける関係価値仮説の研究は，被害者側から検討したものが多い。その中で Burnette ら（2012）の研究では，被害者は，関係価値が高いだけでなく，再犯可能性の低い（裏切りのリスクが低い）加害者を許す傾向にあることが示されている。たとえその関係がどれほど価値あるものだとしても，搾取的な加害者との関係を維持することでは許した者が損失分を回収することは出来ないため，この意思決定ルールは適応的である（McCullough et al., 2013）。また，相手の行動が繰り返されないものであれば許しが促されるという結果は，従来の帰属モデルとも合致している（e.g., Gold & Davis, 2005）。

この知見は，被害者は加害者の意図を正確に読む必要があることを示唆している。つまり，真に仲直りをしたい加害者は，その意図が誠実なものであることを被害者に伝えなければならない。Ohtsubo & Watanabe（2009）のコストリーシグナリング理論を基にしたコストのかかった謝罪についての知見は，まさにこの問題をいかにしてヒトが解決しているかを示している。

1.5. 仮説と共変数

関係価値仮説では，相手との関係の価値が仲直りを動機付けると論じている。では，相手との関係が価値の高いものであった場合，真に後悔している加害者はどのような行動をとるだろうか。関係の価値は，コストを支払ってでも謝罪しようとする動機づけを促進するのではないだろうか。先行研究は，謝罪の受け手が謝罪にかかっているコストが高いときにその謝罪者が正直であると判断することを明らかにしているが，加害者がどのような相手に対してであれば謝罪にコストを支払うのかという予測については検証していない。したがって本研究では，コストのかかった謝罪を行うという加害者の意志を関係の価値が促すか否かを検証する。

関係価値の効果を検証するために，本研究では関係の価値を，パートナーの存在が特定の目標を達成する見込みを高める程度，と操作的に定義する（Fitzsimons & Shah, 2008）。昨今の研究では，特定の目標を達成したいときにあるパートナーが役立つ場合，そのパートナーに対する親近感が高まること（Fitzsimons & Shah, 2008），また，相手に対する親近感は謝罪への意志を促進することが示されている（Exline et al., 2007）。このように親近感は関係の価値と関連していると考えられるが，関係の価値は親近感よりも，個人の適応度と直に関わっている。したがって，本研究では親近感の効果は統制し，主要な独立変数としては関係の価値に注目する。

くわえて，親近感は被害者から許しを得られるという加害者の期待を促すと指摘されていることから（Hodgins & Liebeskind, 2003），本研究でも許しへの期待を測定する。しかし，いずれの研究でも許しへの期待と親近感の相関係数は低かったため，重回帰分析では両変数を同時に投入した。

1.6. 研究の概要

本論文は 6 つの調査と実験からなる。まず研究 1 と 2 では，場面想定法を用いた質問紙実験を行った。参加者は実際の友人に対してある過失を与えてしまうというシナリオを読み，その友人の関係の価値を評定した。それから，友人に謝罪するためになんらかの不自由（たとえば大事な用事をキャンセルする）を受け入れる（研究 1），あるいはなんらかの補償を申し出る（研究 2）という

意志の程度を回答した。研究 3 では，研究 1・2 で得られた知見の外的妥当性を検証するために回想法を用いた質問紙調査を行い，実際の過失場面の中でも関係の価値が加害者の謝罪にかけるコスト量を予測するかを確認した。この研究 3 では過失を与えてしまった対象として，職場の上司や学校の先生といった近しくない関係の相手を想起している参加者が多かった。そこで研究 4 はフォローアップとして，想起する相手を恋人や友人に限定し，そのような近しい相手に対する実際の過失経験について回答してもらった。くわえて，関係性が安定しない二者間では，葛藤が発生した時点での関係の価値が今後期待されうるものとは一致しないために，関係の価値と謝罪との関連が他の関係性のときとは異なっているかも知れない。そこで，研究 5 ではまだ発展途上にある関係の相手を想起してもらい，場面想定法を用いた質問紙調査を行った。最後に，過失に対する被害者の反応が加害者の行動に影響を与える点を考慮し，研究 6 ではどのような反応であっても関係の価値が高い相手に対して仲直りしようという意志が促されるかについて，回想法を用いたインターネット調査により検証した。

2. 研究 1

2.1. 目的

研究 1 では，二者間の関係の価値と加害者が行うコストのかかっている謝罪との関連を検討する。また，2 変数の他にどのような要因がかかわっているかを明らかにする。

2.2. 方法

2.2.1. 参加者と実験デザイン

5 つの大学に所属する学生 546 名（奈良大学 36 名，広島修道大学 74 名，関西学院大学 103 名，北海学園大学 215 名，神戸大学 118 名）が実験に参加した。分析では，回答に不備のあった 17 名のデータを排除し，529 名分（男性 289 名，女性 240 名，$M_{\mathrm{age}} \pm SD = 20.22 \pm 2.07$）のデータを用いた。

参加者は，2（被害者との関係：親友 vs. 普通の友人）×2（シナリオ：待ち合わせ vs. 秘密）のいずれかに割り振られた。参加者は，自身の特定の親友，あるいは普通の友人を傷付けてしまう架空のシナリオを読んだ。このように被害者との関係について指定した理由は，想起する相手との親近感に偏りが出ないようにするためである。どのような関係の友人かを指定せずに友人を一人想起するように参加者へ指示した場合，思い浮かびやすい人間，つまり近しい相手を想定した回答に偏ってしまう可能性が高い。そのような偏りを避け，想定する相手との親密さに充分な分散をもたせるために，被害者との関係について 2 条件を設けた。この操作により，親近感と連動していると考えられる関係の価値についても回答が偏らないようにした（Fitzsimons & Shah, 2008）。本研究では関係の価値を直接操作していないが，これは関係の価値を包括的に測定する尺度を用いており（詳細は後述），関係の価値低条件にあたる「どのような場面においても自分にとって役に立たない相手」を想起させることが困難なためである。また，結果の一般性を確認するために，過失シナリオは以下の 2 種類を用意した。

> 待ち合わせシナリオ：あなたは，A さんと遊びに行く約束をして，待ち合わせをしました。ところが，あなたはうっかりそのことを忘れてしま

い，待ち合わせの場所に行きませんでした。後日，あなたはＡさんとの約束をすっかり忘れていたことを思い出しました。

秘密シナリオ：あるとき，友人たちとの会話で，その場にはいないＡさんのことが話題になりました。話の流れで，あなたもＡさんについて知っていることを話しました。後日，あなたは，自分がＡさんの秘密まで話してしまったことに気がつきました。あなたは，会話に加わっていた友人たちがそのことでＡさんについて悪く思うことはないと確信できます。しかし，あなたはそのことについて「他の人には絶対に言わないでほしい」とＡさんから口止めされていました。

2.2.2. 手続きと質問項目

参加者はまず，自分の親友，あるいは普通の友人の内のひとりについて思い浮かべ，そのイニシャルを記入するように指示された。それから，その実際の友人について，関係の価値などを含むいくつかの質問に回答した。関係の価値については，想定した友人が自分にとって実際的にどれほど役に立っているかを，他者の手助けが必要だと考えられる身近な 6 場面（大学での学業面，サークル・クラブなどの課外活動，就職活動や進路選択，人間関係，アルバイト，前述以外に持っている目標を達成する為に）について各 7 件法（とても邪魔になる：–3 ～ とても役に立つ：＋3）で評定してもらった。幅広い目標をカバーすることを目的としてそれぞれの目標を設定したために，この 6 項目の内的整合性は必ずしも高くなるとは考えていなかったが（cf. John & Benet-Martinez, 2000），充分な値が得られた（α = .71）。これらの平均を，関係の価値の値とした。

次に，想定した友人に対して，ふたつのシナリオの内いずれか一方を呈示し，もし実際にそのようなことが起こったとしたら罪悪感，恥，誇り感情をそれぞれどの程度経験すると思うかを回答してもらった。これは，近年の研究で価値ある相手に対しては強く罪悪感を経験することが示されているため，本研究でも罪悪感の測定を行った（Nelissen, 2014）。この測定には State Shame and Guilt Scale（以下 SSGS; Tangney & Dearing, 2002; まったく感じない：1 ～

まさにそう感じる：5）を用い，罪悪感のほかに恥，誇りについても測定した。

研究 1 では，謝罪コストを操作的に“可能な限り早く謝るために他の用事をキャンセルする”ものと定義した。参加者には，上述のシナリオ読んだ後，以下の 6 パターンの架空の用事を示し，どれだけその用事をキャンセルしてもよいと思うかを 4 件法（1：ほぼ確実に，用事を済ませてから後日謝りに行く，2：おそらく，用事を済ませてから後日謝りに行く，3：おそらく，用事をキャンセルしてすぐに謝りに行く，4：ほぼ確実に，用事をキャンセルしてすぐに謝りに行く）で回答させた（α ＝.79）：「大好きなアーティストのコンサートに行くことになっている」，「現在遠いところに住んでいる家族のひとりが近くに来るので，一緒にご飯を食べに行く約束をしている」，「大学で健康診断を受けることになっている。その日大学で受診できない場合は，一般の病院で自費で受診しなければならない」，「別の同性の友人から悩み事があるので相談にのってほしいと頼まれている」，「アルバイトが入っている」，「恋人と一緒に映画を観に行く予定である」。

最後に，許しへの期待として，この出来事について相手に謝らないとしても，相手は参加者を許してくれるとどのくらい思うかを 4 件法（絶対に許してくれない：1 ～ 絶対に許してくれる：4）で回答してもらった。ほかに，もし謝れば許してくれるとどのくらい思うか（条件付きの許しへの期待），この出来事によってどれくらい相手からの信頼を損なうと思うか（不信感），謝らないままでいたらどのくらい相手がつきあいをやめようとすると思うか（関係継続の危機）についても，4 件法で回答してもらった。質問紙の終わりには，全質問を回答した後の考えや意見について自由に記述してもらう欄を設けた。

2.3. 仮説の検証

謝罪コストと主要な変数間の相関係数を Table 1 に示す（全変数間の相関係数については付録の Table 1b に示す）。謝罪コストは性別（0＝ 男性，1＝ 女性; r = .17, df = 527, p < .001），シナリオ（0＝ 秘密，1＝ 待ち合わせ; r = .19, df = 527, p < .001），被害者との関係の価値（–3 ～ ＋3; r = .20, df = 527, p < .001），親近感（普通の友人 ＝0，親友 ＝1; r = .15, df = 527, p = .001），罪悪感（r = .40, df = 527, p < .001）とそれぞれ正の相関関係にある一方，許し

Table 1 各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 1, N= 529）

	M (1 の割合)	SD	1	2	3	4	5	6
1. 謝罪コスト（1～4）	1.86	0.68	—					
2. 性別 (0 = 男性, 1 = 女性)	(.55)		.17***	—				
3. シナリオ (0 = 秘密, 1 = 待ち合わせ)	(.51)		.19***	.04	—			
4. 関係の価値（–3～＋3）	0.8	0.72	.20***	.09*	.06	—		
5. 許しへの期待（1～4）	2.55	0.68	–.08+	–.10*	–.18***	.05	—	
6. 親近感 (0 = 普通の友人, 1 = 親友)	(.50)		.15***	–.02	.01	.34***	.19***	—
7. 罪悪感（1～5）	3.95	0.93	.40***	.28***	.20***	.10	–.23***	.05

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

への期待との間には有意な関連はみられなかった（r = –.08, df = 527, p = .077）。謝罪コストと許しへの期待との相関が有意でない点については，許しへの期待が高い相手が同時に親近感の高い相手でありやすいために（r= .19, df= 527, p = .077），その関連が打ち消されてしまったのかもしれない。つまり，親近感の高さからどうせ許してもらえるから謝る必要がないという効果がある一方，価値の高さからきちんと謝ろうとする効果もあり，これらの相反する効果が相殺しあってしまった可能性が考えられる。

そこで，謝罪コストを目的変数，性別，シナリオ，関係の価値，許しへの期待，親近感を説明変数とする重回帰分析を行った（$F_{5, 523}$ = 12.51, p < .001, adjusted R^2 = .10; Table 2）。このとき，被害者の関係の価値と親近感の間の相関は有意だが（r = .34, df = 527, p < .001），多重共線性が問題となるほどには高い値ではないため，両方を説明変数として扱った。結果は仮説を支持し，謝罪コストへの関係の価値の効果は有意であった（β = .15, p = .001）。つまり，参加者は関係価値の低い友人よりも，関係価値の高い友人に対してより熱心に仲直りしようとしていた。

くわえて，性別の効果も有意であった（β = .15, p < .001）。この性差については，女性の方が男性よりも謝罪しやすいという先行研究の知見と一致している（e.g., Gonzales, Pederson, Manning, & Wetter, 1990）。また，シナリオの効果も有意であった（β = .16, p < .001）。この結果を解釈するにあたり，

Table 2 重回帰分析の結果（研究 1, N= 529）

予測変数	謝罪コスト		罪悪感	
	β	SE	β	SE
性別（0＝ 男性, 1＝ 女性）	.15***	.042	.25***	.041
シナリオ	.16***	.042	.16***	.041
関係の価値	.15**	.044	.06	.043
許しへの期待	–.06	.043	–.19***	.042
親近感	.11*	.043	.06	.043

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

謝罪コスト：$F_{5, 523}$ = 12.51, p < .001, adjusted R^2 = .10

罪悪感： $F_{5, 523}$ = 19.39, p < .001, adjusted R^2 = .15

質問紙の最後に設けた自由記述欄の回答が手掛かりとなるだろう。友人の秘密をもらしてしまうことで友人の信頼を裏切ってしまうという秘密シナリオ条件に割り振られた参加者の一部は，その裏切りに友人が気付くまでは謝らないでおく，という内容を自ら記述していた。この，「様子見」とでも言うべき方法を秘密シナリオ条件の参加者がとることで，それがシナリオの違いによる予期せぬ効果となって，当該条件での謝罪コストが低下したのかもしれない。したがって，研究 2 では様子見が使えないようなシナリオに変更する。

2.4. 補足的分析

Table 1 に示したとおり，関係の価値は罪悪感得点とも有意に相関している（r = .10, df = 527, p = .019）。この結果は，Nelissen（2014）の研究での知見を確認するものである。興味深いことに，罪悪感は対人的感情であると知られているにもかかわらず（e.g., Baumeister, Stillwell, & Heatherton, 1994），親近感と罪悪感の相関は有意ではなかった（r = .05, df = 527, p = .301）。これは，重回帰分析で他の要因を統制しても（$F_{5, 523}$ = 19.39, p < .001, R^2 = .15; Table 2），同様の結果となった（β = .06, p = .143）。さらに，罪悪感が謝罪コストに対する関係の価値の効果を媒介するか否かを検証したところ，媒介効果は有意であった（間接効果の 95%信頼区間 [0.0006, 0.08]）。ただし，部分媒介にとどまった（Figure 1）。

以上から，相手との関係の価値と謝罪にコストをかけてもよいと考えるか否かは関連していることが明らかになった。これは仮説を支持する結果である。

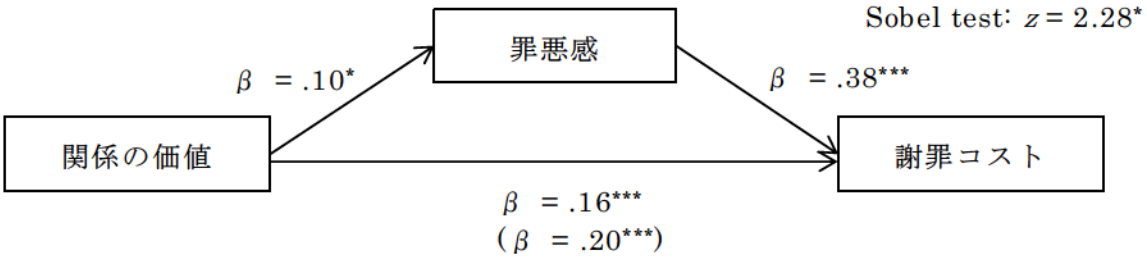


Figure 1 関係の価値と謝罪コスト間における罪悪感の媒介効果（研究 1）

（　）内は媒介変数を含める前の単回帰分析の結果.

*+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

3. 研究 2

3.1. 目的

研究 1 では関係の価値と謝罪コストが関連しているという仮説を支持する結果が得られたが，測定した謝罪コストの操作的定義は「用事をキャンセルする」というものであった。ところが一般的なコストのかかっている謝罪とは，相手の被害・損失についてコストをかけて回復しようとする補償であろう（De Cremer, 2010; Desmet et al., 2010, 2011; Fehr & Gelfand, 2010; Schweitzer, et al., 2006）。

よって，研究 1 の結果は謝罪コストが一般的な形でないために得られたものであるという可能性を排除するために，研究 2 では補償の意志を参加者にたずねる。

3.2. 方法

3.2.1. 参加者と実験デザイン

愛知学院大学に所属する学生 329 名が参加した。回答に不備のあった 18 名のデータを除いた 311 名（男性 191 名，女性 120 名，$M_{age} \pm SD = 18.71 \pm 2.64$）を分析対象とした。実験は，大教室での質問紙配布というかたちで実施された。

参加者は，2（被害者との関係：親友 vs. 普通の友人）×2（シナリオ：待ち合わせ vs. 破損）のいずれかに割り振られた。被害者との関係（親近感）条件は，研究 1 と同様，参加者にとっての被害者の親近感および関係の価値の程度を充分に分散させるために設けた。参加者は，自身の特定の親友，あるいは普通の友人を傷つけてしまう架空のシナリオを読んだ。また，結果の外的妥当性を高めるために，過失シナリオは次の 2 種類を用意した。

> 待ち合わせシナリオ：あなたは A さんと朝から待ち合わせをしていました。しかし，その前の晩におもしろいテレビ番組があり，夜ふかしをしたために，あなたは寝坊してしまいました。あなたは慌ててメールを入れて待ち合わせ場所に行きました。しかし，結局，A さんを 1 時間ほど待たせることになってしまいました。

破損シナリオ：あなたは A さんから本を借りました。その本は，すでに廃刊になっている本で，A さんはそれをインターネット・オークションでたまたまみつけて 1000 円で購入したそうです。自分の家でその本を読んでいたときに，あなたはうっかりその本に炭酸飲料をこぼしてしまいました。その本はベタベタして，もう読むことができなくなりました。

3.2.2. 手続きと質問項目

質問紙の構成は，2 点の変更以外は研究 1 で用いたものと同じであった。研究 2 では関係の価値の測定の前に，対象の友人との主観的な親近感の測定として，Inclusion of the Other in the Self scale（IOS scale; Aron, Aron, & Smollan, 1992）に回答させた。IOS とは，“自分”“相手”と名付けられたふたつの円の重なり具合を，全く重なっていない状態（1）から最も重なっている状態（7）までの 7 段階の図で表しているもので，最も自分と相手の関係に近しいと思う図を選択してもらうことで相手との主観的な親近感を測定する尺度である（Figure 2）。また，謝罪にコストをかけようとする参加者の意志については，“補償をしようとする意志”であると操作的に定義した。謝罪コストは，以下の 2 項目を用いて測定した：「おわびに，相手にお昼ご飯やおやつをおごると申し出る」「おわびに，相手に後日何かプレゼントをする」。また，コストのかからない謝罪を行う意志についても，測定した：「相手に「ごめん

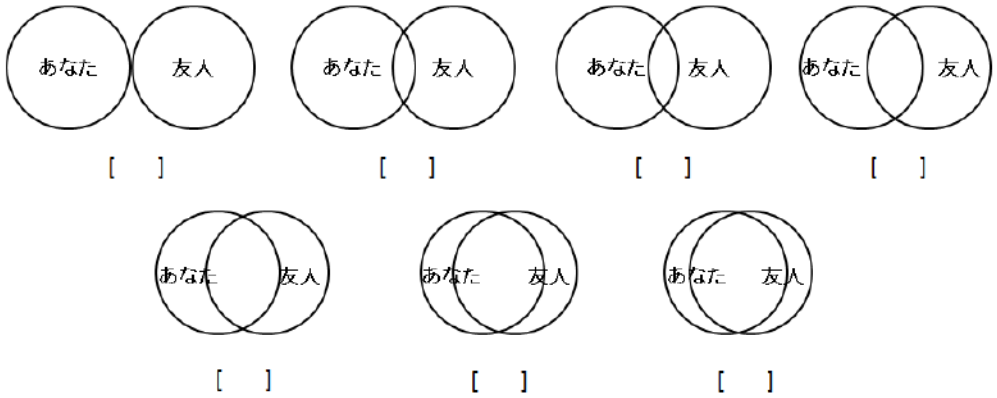


Figure 2 主観的な親近感の測定に用いた Inclusion of the Other in the Self scale（Aron et al., 1992）

なさい／ごめんね」等と言葉にして謝る」。これらは絶対にそうしない（1）から絶対にそうする（4）までの 4 件法で評定してもらった。また，上述の 3 項目以外に，過失後にとるかもしれない行動として，以下の 3 項目についてもそれぞれ 4 件法で評定してもらった：「A さんになぜ炭酸飲料をこぼしてしまったのか説明する（釈明）」「炭酸飲料をこぼしたことについて，A さんの前で自分のことを茶化したり，卑下したりする（卑下）」「炭酸飲料をこぼしたことについて，A さんの前で恥ずかしそうに（ばつが悪そうに）する（恥の表出）」。さらに，金銭をはらえば相手を傷つけることを回避できる場合に，どれくらいそうしようと思うかを回答してもらうことで，過失を回避したいと思う程度を測定した（過失の回避）：「（待ち合わせシナリオの場合）A さんに遅刻するという連絡をした後，タクシーで待ち合わせの場所に行けば，2000 円ほどかかりますが，待ち合わせの時間に間に合いそうだということに気づきました。あなたは，タクシーを使いますか？／（破損シナリオの場合）あなたはインターネット・オークションで A さんから借りたのと同じ本が 2000 円で売られているのを見つけました（A さんは同じ本を 1000 円で手に入れていました）。あなたは，2000 円でこの本を買って A さんに返しますか？」。

3.3. 結果

謝罪コストと主要な変数間の相関係数を Table 3 に示す（全変数間の相関係数については付録の Table 3b に示す）。謝罪コストに関する 2 項目間には，有意な正の相関がみられた（$r = .37$, $df = 309$, $p < .001$）。これらの項目について，それぞれを従属変数として扱った場合の主要な分析結果は似たパターンになったため，本研究では 2 項目を平均した合成変数を謝罪コストとして扱う。

Table 3 各変数の平均値、標準偏差、および変数間の相関係数（研究 2, N = 311）

	M (1の割合)	SD	1	2	3	4	5	6	7
1. 謝罪コスト（1〜4）	2.60	0.73	—						
2. コストのかからない謝罪（1〜4）	3.83	0.46	.18**	—					
3. 性別（0 = 男性, 1 = 女性）	(.61)		.13*	.15**	—				
4. シナリオ（0 = 破損, 1 = 待ち合わせ）	(.50)		–.35***	–.02	.01	—			
5. 有用性（–3 〜 +3）	0.66	0.80	.21***	–.13*	.12*	.00	—		
6. 許しへの期待（1〜4）	2.62	0.70	–.18**	.03	–.02	.20***	-.02	—	
7. 親近感（1〜7）	3.35	1.68	.16**	–.18**	.10+	.02	.41***	.08	—
8. 罪悪感（1〜5）	3.77	0.92	.34***	–.26***	.22***	–.35***	.17**	–.25***	.08

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

- 17 -

謝罪コストを目的変数，性別（男性＝0，女性＝1），シナリオ（破損＝0，待ち合わせ＝1），関係の価値，許しへの期待，親近感を説明変数として重回帰分析を行った結果を Table 4 に示す（$F_{5, 305} = 15.41$, $p < .001$, adjusted $R^2 = .19$）。謝罪コストに対する関係の価値の効果は有意であり（$\beta = .16$, $p = .006$），仮説を支持する結果となった。つまり，参加者は関係の価値が低い友人に対してよりも，関係の価値が高い友人に対するときの方が，仲直りを熱心に行うことが分かった。加えて，許しへの期待とシナリオの効果も有意であった（許しへの期待 $\beta = -.11$, $p = .006$; シナリオ $\beta = -.34$, $p < .001$）。これは，許しへの期待が高い場合にはコストをかけようとしなくなること，また，参加者は本を汚してしまった場合の方が待ち合わせを忘れてしまった場合よりもコストをかけようとすることを示している。後者についてはおそらく，汚した本を弁償するというように，補償するという行為が自然な対応であるためだと考えられる。性別の効果については，有意傾向に留まった（$\beta = .10$, $p = .050$）。

興味深い結果として，参加者のコストのかからない謝罪への意志を目的変数として，同様の重回帰分析を行ったところ（$F_{5, 305} = 3.59$, $p = .004$, adjusted $R^2 = .04$），性別と親近感のみが有意となった（性別 $\beta = .13$, $p = .019$; 親近感 $\beta = .14$, $p = .021$）。Table 3 に示したとおり，罪悪感得点は関係の価値と有意な正の相関関係にあるが，親近感との関連は見られなかった。罪悪感を従

Table 4 重回帰分析の結果（研究 2, $N = 311$）

予測変数	謝罪コスト		コストのかからない謝罪		罪悪感	
	β	SE	β	SE	β	SE
性別（0＝ 男性, 1＝ 女性）	.10^{+}	.052	.13*	.056	.20***	.051
シナリオ	–.33***	.052	.03	.057	.31***	.052
関係の価値	.16**	.056	.06	.061	.13*	.056
許しへの期待	–.11*	.052	–.04	.057	–.19**	.052
親近感	.10^{+}	.056	.14*	.061	.03	.056

$^{+} < .10$, $^{*} < .05$, $^{**} < .01$, $^{***} < .001$

謝罪コスト: $F_{5, 305} = 15.41$, $p < .001$, adjusted $R^2 = .19$

コストのかからない謝罪: $F_{5, 305} = 3.59$, $p = .004$, adjusted $R^2 = .04$

罪悪感: $F_{5, 305} = 3.59$, $p = .004$, adjusted $R^2 = .04$

属変数として重回帰分析を行ったところ（$F_{5, 305} = 17.27$, $p < .001$, adjusted $R^2 = .21$），他の変数の影響を統制しても，関係の価値は罪悪感を予測することが示された（$\beta = .13$, $p = .023$; Table 4）。また，罪悪感は関係の価値と謝罪コスト間を媒介し，その部分媒介モデルは有意であった（間接効果の 95%信頼区間 [0.017, 0.095]）。ただし，研究 1 と同様，部分媒介にとどまった（Figure 3）。

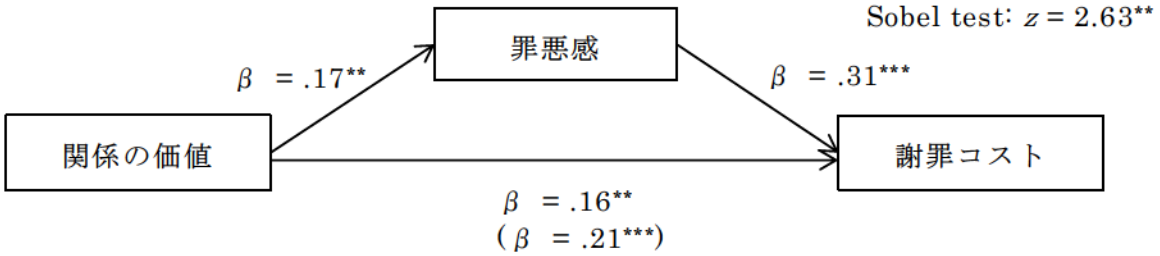


Figure 3 関係の価値と謝罪コスト間における罪悪感の媒介効果（研究 2）
（ ）内は媒介変数を含める前の単回帰分析の結果.
$^{+} < .10$, $^{*} < .05$, $^{**} < .01$, $^{***} < .001$

4. 研究 3

4.1. 目的

研究 3 では，関係の価値－謝罪コスト間の外的妥当性について検証することを目的とする。これまでの研究では，参加者に架空の過失場面を呈示する場面想定法を用いた実験を行ってきた。研究 3 では，参加者に過去の経験としての過失を想起してもらい，被害者の関係の価値およびコストのかかった謝罪をしたか否かを回答させることで，実際の過失場面であっても関係の価値は謝罪にかけるコストを促すか否かを検証する。

4.2. 方法

4.2.1. 参加者と調査デザイン

神戸大学に所属する学生 192 名（男性 84 名，女性 108 名，$M_{age} \pm SD = 19.43 \pm 2.06$）が質問紙に回答した。この内，2 名は回答に不備があったため，190 名を分析対象とした。調査は，少人数の集団ごとに質問紙を配布するかたちで行われ，参加者には少額の謝礼金が支払われた。

4.2.2. 手続きと質問項目

参加者には，回答者に友人・恋人・知り合いなど（ただし家族は除く）を怒らせてしまった特定の出来事について簡単に記述してもらい，その出来事及び相手についていくつかの質問に回答してもらった。具体的には，相手との関係性（親友・恋人・普通の友人・その他の関係）のいずれに該当するか，相手に対する主観的な親近感（IOS），相手の関係の価値，自分が謝らなくても相手が自分を許してくれそうだったかどうか（許しへの期待）をたずねた。また，過失がおこった際に経験していた罪悪感，恥についても回答させた（誇りに関する項目を除いた SSGS）。その後，以下の 5 項目について，それぞれ 3 択（した・しなかったけれど場合によってはしたかもしれない・しなかった）で回答してもらった：ⅰ）相手に「ごめんなさい／ごめんね」等と言葉にして謝った，ⅱ）おわびに，相手にお昼ご飯やおやつ等，何かをおごった（おごると申し出た），ⅲ）相手になぜその出来事が起こったのか説明した，ⅳ）おわびに相手に何かプレゼントしたり，弁償・補償をしたり（弁償・補償を申し出た），ⅴ）

相手の被害・ダメージを回復しようとつとめた。または，相手がそうするのを手伝った（手伝うと申し出た）。これらの項目は，実際の葛藤場面で参加者がとるだろう融和行動を幅広くカバーするために，Tabak, McCullough, Luna, Bono, & Berry（2012）が作成した Transgressor Appeasement and Reconciliation Checklist を参考に謝罪コストに関する質問を拡張したものである。この内，ⅰとⅲはコストのかからない謝罪に該当する項目であり，ⅱ，ⅳ，ⅴはコストのかかる謝罪に該当する。分析する際には，それぞれの項目の評定に対して，次の数値を割り振った：した ＝1，しなかったけれど場合によってはしたかもしれない ＝0.5，しなかった ＝0。

また，上述の主要な項目のほかに過失に関する質問として，自分の過失はどれくらい深刻なものだと思ったか（過失の深刻さ），相手からの信頼をどのくらい損なったか（不信感），相手はどれくらい腹を立てていたか（被害者の怒り），その出来事は相手をどれくらいイライラさせたか（被害者の苛立ち），相手はどれくらい関係をやめようと思ったか（関係継続の危機）についてたずねた。くわえて，過失後の自身の態度として，自分を茶化したりしたか（卑下），恥ずかしそうな態度をとったか（恥の表明）について 3 択（した・しなかったけれど場合によってはしたかもしれない・しなかった）で回答してもらった。さらに，過失後の関係について，親近感を測定するとともに，相手との関係を断ったかどうかを 2 択でたずねた。

4.3. 結果

4.3.1. 被害者との関係

回答者が特定の葛藤経験の相手として思い浮かべた関係性は，親友あるいは恋人が 17.89%，普通の友人は 25.79%，その他は 56.32%だった。その他の関係性，およそ 4 分の 3 は，アルバイト先の上司や学校の先生などであった。このその他というカテゴリーは，友人や恋人といった関係とは質的に異なると予想される。Clark & Mills（1979）は，このその他のカテゴリーで挙げられているような関係を“交換的関係”として，友人や恋人といった“共同的関係”と区別している。したがって研究 3 では親近感に相当する変数として，IOS ではなく，関係の質的な差異を表す親友あるいは恋人，普通の友人，その他を用

いた。分析の際にはそれぞれに 3，2，1 の数値を割り振った。

4.3.2. 仮説の検証

関係の価値に関する 6 項目の平均を算出し，合成変数を作成した（α =.69）。また，謝罪コストは 3 項目を用いて測定しているが，その内の 2 項目については，その融和行動をとったと回答した参加者の数が非常に少なかった（食事をおごったのは 7 名，プレゼントをしたのは 8 名）。一方，被害者のダメージを修復したと回答した参加者は 56 名，必要があればしたと回答した参加者は 32 名であった。よって，食事をおごる，プレゼントをするという 2 項目を，ダメージを修復したという項目と合成するのではなく，ダメージを修復したという項目を単独で謝罪コストとして扱うことにした。ただし，3 項目を平均した合成変数を用いた場合でも，主要な結果は変わらなかった。

謝罪コストと主要な変数間の相関係数を Table 5 に示す（全変数間の相関係数については付録の Table 5b に示す）。関係の価値と謝罪コスト間の相関係数は，有意傾向にとどまった（r = .13, df = 188, p = .080）。しかし，関係の価値と性別，許しへの期待，親近感を説明変数とした重回帰分析を行ったところ（$F_{4, 185}$ = 3.58, p = .008, adjusted R^2 = .05; Table 6），関係の価値は謝罪コストを有意に予測することが示された（β = .16, p = .036）。また，許しへの期待の主効果は有意傾向にとどまった（β = –.14, p = .056）。

Table 5 各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 3, N = 190）

	M (1 の割合)	SD	1	2	3	4	5
1. 謝罪コスト（ダメージの修復をしなかった = 0，場合によってはした = 0.5，した = 1）	0.38	0.44	—				
2. 性別 (0 = 男性, 1 = 女性)	(.44)		–.03	—			
3. 関係の価値（–3～+3）	0.33	0.81	.13^{+}	.03	—		
4. 許しへの期待（1～4）	2.36	0.80	–.08	.09	.29***	—	
5. 親近感（1 =その他，2 = 普通の友人, 3 = 親友・恋人）	1.62	0.77	.20	.04	.07	.12	—
6. 罪悪感（1～5）	2.91	1.09	.30**	.07	.16*	–.17*	.07

$^{+}$ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 6 重回帰分析の結果（研究 3, N= 190）

予測変数	謝罪コスト		罪悪感	
	β	SE	β	SE
性別（0 = 男性, 1 = 女性）	–.03	.071	.08	.070
関係の価値	.16*	.074	.22**	.073
許しへの期待	–.14+	.075	–.25***	.074
親近感	.20**	.071	.08	.071

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

謝罪コスト: $F_{4, 185}$ = 3.58, p = .008, adjusted R^2 = .05

罪悪感: $F_{4, 185}$ = 4.52, p = .002, adjusted R^2 = .07

4.3.3. 補足的分析

Table 5 に示した通り，罪悪感得点は関係の価値と有意な正の相関にある一方（r = .16, df = 188, p = .030），親近感とは関連が見られなかった（r = .07, df = 188, p = .335）。また，謝罪コスト―関係の価値間の相関係数は有意傾向であったため（r = .13, df = 188, p = .080），研究 1 で行った媒介分析を今回は行わなかった。しかし，関係の価値，罪悪感の両変数を説明変数に入れ，謝罪コストを目的変数とした重回帰分析を行ったところ（$F_{2, 187}$ = 9.77, p < .001, adjusted R^2 = .09），関係の価値の効果は有意ではない一方（β = .08, p = .243），罪悪感の効果は有意であった（β = .28, p < .001）。

コストのかかっていない謝罪に該当する 2 項目同士は，有意に相関していた（r = .19, df = 188, p = .009）。この 2 項目の合成変数を目的変数に，性別，関係の価値，許しへの期待，親近感を説明変数にいれた重回帰分析を行ったところ（$F_{4, 185}$ = 3.71, p = .006, adjusted R^2= .05），許しへの期待（β = –.23, p = .002），および親近感（β = .18, p = .011）はそれぞれコストのかかっていない謝罪を有意に予測する一方，関係の価値は予測しないことが示された（β = .08, p = .296）。また，2 項目間の相関は低いため，項目ごとにも分析した。その結果，項目 i を目的変数とした重回帰分析では（$F_{4, 185}$ = 2.39, p = .052, adjusted R^2= .03），関係の価値の効果は有意傾向であり（β = .13, p = .088），項目 iii を目的変数とした重回帰分析では（$F_{4, 185}$ = 3.13, p = 016., adjusted R^2= .04），関係の価値の主効果は有意ではなかった（β = .01, p < .905）。留意すべき点として，参加者の内 81.58%が言葉による謝罪を行ったと回答して

いた。くわえて，コストのかかっていない謝罪をせずにコストのかかる謝罪だけをした参加者は 2 名であったのに対し，コストのかかっていない謝罪だけをした参加者は 77 名であった。これは，少なくとも言葉のみの謝罪の一部はおざなりな謝罪であるという考えと一貫する結果である。

5. 研究 4

5.1. 目的

研究 3 では，参加者は共同的関係よりも交換的関係にある相手に対しての過失を報告していた。そこで研究 4 では，想起する過失の被害者が友人や恋人といった共同的関係にある相手になるように操作することで，研究 3 の追試を行った。

5.2. 方法

5.2.1. 参加者と調査デザイン，手続き，質問項目

調査は 3 大学で行われ，学生 339 名が参加した（神戸大学 99 名，関西学院大学 32 名，立命館大学 208 名）。多くの参加者が指示文に従わず，交換的関係にある相手や家族を想起したり，あるいは全ての質問項目に回答していなかったりした。これらの回答を除いたところ，分析対象者は 224 名（男性 100 名，女性 124 名，$M_{age} \pm SD = 20.34 \pm 1.68$）であった。このような不備が多かった理由としては，研究 3 が少人数の集団ごとに質問紙を配布し，参加者には少額の謝礼金を支払う形式であったのに対し，研究 4 は大教室での一斉配布という形式で行われたためだと考えられる。

他にも，研究 3 から幾つかの変更点があった。実際に経験した過去の過失を想起してもらう際，参加者には友人，あるいは恋人が相手であったものを想起するよう，明確に指示した。また，授業内の短い時間で調査を実施できるように，質問紙の構成を変え，過失に関する自由記述欄，親近感を測定する IOS，関係の価値，許しへの期待，謝罪に関する項目のみに絞った。この内，新たに加えた項目として，その出来事について，自分にどれだけ責任があると思うかを 10%刻みの 11 段階で評定してもらった（過失の責任）。

5.3. 結果

関係の価値に関する 6 項目の平均を算出し，合成変数を作成した（$\alpha = .69$）。謝罪コストと主要な変数間の相関係数を Table 7 に示す（全変数間の相関係数については付録の Table 7b に示す）。関係の価値はコストのかかる謝罪（被害者のダメージを修復したか否か）との相関は有意ではなかったが（$r = .04$, df

Table 7 各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 4, N = 224）

	M (1 の割合)	SD	1	2	3	4	5
1. 謝罪コスト（ダメージの修復をしなかった = 0，場合によってはした = 0.5，した = 1）	0.58	0.47	—				
2. コストのかからない謝罪（0〜1）	0.74	0.34	.24***	—			
3. 性別（0 = 男性, 1 = 女性）	(.45)		–.04	–.05	—		
4. 関係の価値（–3〜+3）	0.67	0.99	.04	.20**	–.01	—	
5. 許しへの期待（1〜4）	2.63	0.83	–.10	–.15*	–.03	.15*	—
6. 親近感（1〜7）	4.29	1.71	.03	.16*	–.00	.17**	.07

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

= 222, p = .533），コストのかかっていない謝罪（コストのかからない謝罪に関する 2 項目は高い正の相関関係にあったため（r = .40, df = 222, p < .001），平均をとって合成変数とした）との相関は有意であった（r = .20, df = 222, p = .002）。

また，重回帰分析を行ったところ（Table 8），単相関の結果と一貫しており，関係の価値はコストのかからない謝罪を予測したが（β = .21, p = .002; $F_{4, 219}$ = 5.65, p = .002，調整済み R^2 = .08），コストのかかる謝罪は予測しなかった（β = .05, p = .469; $F_{4, 219}$ = 0.79, p = .536，調整済み R^2 = .00）。

Table 8 重回帰分析の結果（研究 4, N = 224）

予測変数	謝罪コスト		コストのかからない謝罪	
	β	SE	β	SE
性別（0 = 男性, 1 = 女性）	–.05	.067	–.05	.064
関係の価値	.05	.068	.21**	.066
許しへの期待	–.10	.068	–.19**	.065
親近感	.03	.068	.13*	.065

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

謝罪コスト: $F_{4, 219}$ = 0.79, p = .536, adjusted R^2 = .00

コストのかからない謝罪: $F_{4, 219}$ = 5.65, p < .001, adjusted R^2 = .08

Table 9 同性の友人を想起した参加者のデータのみでの各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 4, N= 129）

	M (1 の割合)	SD	1	2	3	4	5
1. 謝罪コスト（ダメージの修復をしなかった ＝ 0，場合によってはした ＝0.5，した ＝1）	0.55	0.47	—				
2. コストのかからない謝罪（0～1）	0.16	0.27	.16+	—			
3. 性別（0 ＝ 男性, 1 ＝ 女性）	(.50)	0.50	–.14	.07	—		
4. 関係の価値（–3～＋3）	0.82	0.96	.15+	.11	.03	—	
5. 許しへの期待（1～4）	2.65	0.84	–.00	–.25*	–.02	.14	—
6. 親近感（1～7）	4.06	1.59	–.06	.09	.09	.18*	.09

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

研究 2 では同性の友人を対象としていたことから，探索的にではあるが，研究 4 でも同性の友人に対する過失を報告していた 129 名（関係の価値の項目が非常に低い 1 名は（z = –2.90），外れ値として除外した）のデータに絞って再分析を行った（Table 9）。その結果，関係の価値と謝罪コスト間の相関は有意傾向になった（r = .15, df = 127, p = .096; Table 9）。過失の相手が異性の友人や恋人であると回答した参加者も含んだデータでは，相関係数は.04 であった。そこで謝罪コストを目的変数とする重回帰分析を行ったところ（$F_{4, 124}$ = 1.52, p = .202，調整済み R^2= .02; Table10），関係の価値の効果は有意傾向で

Table 10 同性の友人を想起した参加者のデータのみでの重回帰分析の結果（研究 4, N= 129）

予測変数	謝罪コスト		コストのかからない謝罪	
	β	SE	β	SE
性別（0 ＝ 男性, 1 ＝ 女性）	–.13	.088	.01	.086
関係の価値	.17+	.090	.26**	.088
許しへの期待	–.02	.089	–.15+	.087
親近感	–.07	.090	.02	.088

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

謝罪コスト: $F_{4, 124}$ = 1.52, p = .202, adjusted R^2 = .02

コストのかからない謝罪: $F_{4, 124}$ = 2.83, p = .027, adjusted R^2 = .05

ある一方（β = .17, p = .066），他の変数は全く関連が見られなかった。また，コストのかからない謝罪を目的変数とした重回帰分析の結果は（$F_{4, 124}$ = 2.83, p = .027，調整済み R^2= .05），関係の価値のみが有意に予測するというものであった（β = .26, p = .003）。

5.4. 考察

研究 4 の結果はこれまでと一貫する傾向にはあるものの，その関連は弱いことが示された。改めて考えてみると，被害者の損失をコストのかかるやり方で直接的に償うというのは，共同的関係における規範に反している（Lydon, Jamieson, & Holmes, 1997）。同性の友人関係の中で謝罪のコストモデルが働いている程度が比較的弱い点については，今後の研究で改めて確認する必要があるだろう。それでもなお，研究 4 の結果（コストのかからない謝罪への強い効果もあわせて）は少なくとも，関係の価値がパートナーに対する仲直りへの動機づけを高めるという考えとは一貫している。

6. 研究 5

6.1. 目的

これまでの研究では，関係の価値が，謝罪を促す，あるいは罪悪感の経験を促すといったような関係修復への動機づけと正の相関関係にあることを示してきた。しかし，このような関係性がみられるのは，二者間の関係の価値が今後大きく変化する見込みのないものだったからこそという可能性が考えられる。安定した長期的な関係は，既に相手との関係性が確立している状態にあり，関係の価値は将来においても変わらないという予想がつく。一方で，今後も付き合いを続けていきたいと考えているが，まだ構築過程にある関係では，将来の関係の価値が今とは変化するかもしれない。このような関係では，関係の価値と謝罪コスト，罪悪感との関連はどうなるのだろうか。具体的には，まだ付き合いが浅い状態では将来の関係の価値が現時点での関係の価値と異なるかもしれないために，現時点での関係の価値が謝罪コストや罪悪感を予測しないかもしれない。

実際，形成期にある関係が他の関係とは異なる規範を持つことを示した知見として，Lydon ら（1997）の研究があげられる。Lydon ら（1997）は，形成期にある関係では，既に仲がよいと互いに認識されているような関係や特に親しくないと思われている関係に比べて，社会的相互作用が重要視され，慎重に社会的交換が行われることを示している。つまり，現在の関係の価値によらず，関係が十分に構築された将来に期待される利益を考慮して，関係維持のための努力がはらわれやすい可能性がある。その結果，関係の価値と謝罪コストとの関連がみられなくなるかもしれない。以上から，研究 5 では，関係の形成時期においても，関係の価値が謝罪コストを予測するかどうかを検討する。

6.2. 方法

6.2.1. 参加者と調査デザイン

京都文教大学の大学生 125 名（男性 49 名，女性 76 名，$M_{age} \pm SD$ = 22.40 ±8.06）が質問に回答した。調査には場面想定法が用いられ，少人数の集団ごとに質問紙を配布するかたちで行われた。

6.2.2. 手続きと質問項目

調査の実施にあたり，質問紙のシナリオを読む際に思い浮かべてもらう相手を，関係形成期にある友人のうちの一人とした。具体的には，“これから大事な友人になりそうな人”を想起するように指示した。参加者の内，58 名（46.40%）が知り合ってから 1 年以内の友人を想起していた。

研究 5 では，上述の思い浮かべる友人についての指示以外は，研究 1 と同じ内容の質問紙を用いた。また，呈示した過失のシナリオは，研究 1 で用いた待ち合わせシナリオであった。具体的な内容は，遊びに行く約束で待ち合わせをしていたがそのことを忘れていて，後日思い出した，というものであった。

ただし研究 5 では，関係価値の測定において，これまでと同様の 6 項目（大学での学業，サークル・クラブなどの課外活動，就職活動や進路選択，人間関係，アルバイト，先に挙げたもの以外の目標）のうち，サークル・クラブなどの課外活動の場面での役に立つ程度をたずねる項目の未回答が目立ったこと（未回答率は当該項目で 27.20%，他項目では 0.80%以下），またこの項目と他の項目間での相関が他項目間の相関と比較して低い傾向にあったことから（Table 11），この項目を除いた 5 項目への回答の平均値を関係の価値として分析した。残りの 5 項目の中でも，未回答となっている項目を含む参加者がいたが，その場合は，回答されている項目の平均を関係の価値とした。この変数のクロンバックのα係数は.50 であった。これはこれまでの研究で用いられてきた同尺度の信頼性と比べてやや低い値ではあるが，ある場面で役立つ相手が必ずしも全ての場面で役立つとは限らないため，そもそも内的整合性の低い尺

Table 11 関係の価値を測定する尺度の各項目間の相関係数（研究 5, N= 125）

	1	2	3	4	5
1. 大学での学業	–				
2. 就職活動や進路選択	.45**	–			
3. 人間関係	–.04	.17+	–		
4. アルバイト	–.01	.14	.18*	–	
5. それ以外の目標	.18*	.32**	.23*	.09	–
6. サークル・クラブなどの課外活動	–.23*	–.15	.18+	–.02	–.05

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

度であると考えられる。その一方，多くの目標達成に役に立つ程度が高い相手は関係価値の高い相手であり，かつその平均値も高くなる。いずれの目標達成にも役に立たない相手は価値の低い相手であり，その平均値も低くなる。したがって，5 項目の平均をとることは妥当と判断した。

6.3. 結果

謝罪コストと主要な変数間の相関係数を Table 12 に示す（全変数間の相関係数については付録の Table 12b に示す）。相関分析の結果，これまでの研究と異なり，関係の価値と謝罪コストの間に有意な相関は見られなかった（r = .10, df = 123, p = .281）。これは，重回帰分析により他の要因の影響を統制しても（$F_{3, 121}$ = 0.88, p = .452, 調整済み R^2 = .00），関係の価値は謝罪コストを予測しないことが示された（β = .08, p = .390; Table 13）。

一方で，関係の価値と罪悪感の間には，有意な正の相関関係があることが示された（r = .20, df = 123, p = .019）。さらに，男女間で罪悪感の強さに違いがないか確認するために，t 検定をおこなった。その結果，女性参加者（M = 4.40, SD = 0.66）の方が男性参加者（M = 4.09, SD = 0.89）よりも罪悪感を強く経験していた（t (123) = 2.21, p = .029, d = 0.41）。これは先行研究の知見と一貫したものである（cf. Roberts, Strayer, & Denham, 2014）。

くわえて，関係の価値と罪悪感の関係が，他の変数を統制しても観察されるかどうかを検討するために，罪悪感得点を目的変数，性別，関係の価値，許しへの期待を予測変数とする重回帰分析を行った（$F_{3, 121}$ = 3.30, p = .023, 調整済み R^2 = .05; Table 13）。その結果，性別・許しへの期待の両変数が統制され

Table 12 各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 5, N = 125）

	M (1 の割合)	SD	1	2	3	4
1. 謝罪コスト（1～4）	2.16	0.60	–			
2. 性別 (0 = 男性, 1 = 女性)	(.39)		.12	–		
3. 関係の価値（–3～+3）	0.98	0.60	.10	.13	–	
4. 許しへの期待（1～4）	2.35	0.60	.04	.03	.16+	–
5. 罪悪感（1～5）	4.27	0.77	.01	.20*	.21*	–.01

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

Table13 研究 5 の重回帰分析の結果

予測変数	謝罪コスト		罪悪感	
	β	SE	β	SE
性別（0＝ 男性、1＝ 女性）	.11	.091	.17^{+}	.088
関係の価値	.08	.092	.20*	.089
許しへの期待	.03	.091	–.05	.089

$^{+}$ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

謝罪コスト: $F_{3, 121} = 0.88$, $p = .452$, adjusted $R^2 = .00$

罪悪感: $F_{3, 121} = 3.30$, $p = .023$, adjusted $R^2 = .05$

ている場合でも，相手との関係の価値が高いほど，参加者は罪悪感を経験しやすいことが明らかとなった（$\beta = .20$, $p = .030$）。これはこれまでの研究および Nelissen（2014）の報告と一致する結果である。しかし，相手から無条件で許してもらえるだろうという許しへの期待の効果は有意ではなかった（$\beta = -.05$, $p = 557$）。

6.4. 考察

研究 5 では，関係の価値が謝罪コストへおよぼす影響について，他の関係性とは社会的交換の規範が異なっていることが示唆されている関係形成期での検討を行った。その結果，関係の価値と謝罪コスト間については，これまでの研究と異なり，有意な関連は見られなかった。一方で，経験される罪悪感とは有意な関連があり，関係の価値が高い相手に対して，罪悪感が経験されやすいことが示された。

このような結果になった理由として，関係に対する認識に関わらず，感情が自動的に生起している可能性が考えられる。対して，関係形成期にある相手との慎重な社会的交換は（Lydon et al., 1997），自動的なものではなく，意識的に行われるものなのかもしれない。そうであれば，関係維持のための感情と行為には，異なる要因が介在している可能性が考えられる。

また，許しへの期待が罪悪感の経験に及ぼす影響についてはこれまでとは異なる結果が示され，形成期にある関係では許しへの期待が罪悪感の経験と無相関であることが明らかになった。このような結果が得られた理由として，形成期にある関係では，相手が自分をどれほど重要視しているのかといった予測が

困難であるためだと考えられる。具体的には，不安定な関係では，相手が自分を大事に思っているか，それともどうでもいいと思っているかといった相手の意図の推測が困難であり，相手がこの関係の維持をどれほど望んでいるかが分からないという状態にある。このように相手の意図の予測が不正確になるために，どのくらい許してもらえそうかという予測をすること自体が意味を持たなくなり，結果として許しへの期待と関係形成期の罪悪感の間には関連が見られないのかもしれない。相手の意図をどのくらい予測できると思っているかどうかが，許しへの期待に影響するか否かについては，改めて検討する必要があるだろう。

留意するべき問題点として，関係形成期の意味を参加者の解釈にまかせざるをえなかったことが挙げられる。実際の友人を想起してもらう場面想定法という性質上，参加者に任意の友人を選んでもらうことは避けられないが，参加者を大学１年生に限ることで，知り合ったばかりの相手が選ばれやすくなるなど，関係形成期の友人の関係を均質化できると考えられる。今後，このようなサンプルを限定した調査が必要である。

7. 研究 6

7.1. 目的

研究 6 では，新たに葛藤発生時に被害者の表出していた感情を統制変数として扱う。これまでは，架空のシナリオを呈示したり（研究 1, 2, 5），実際の過失状況を回想させたりした際に（研究 3, 4），相手の感情が加害者の謝罪に与える影響を考慮していなかった。従来の研究では，感情表出は表出者の態度や行動を伝達する機能を持つと論じられている（Keltner & Haidt, 1999）。実際，悲しみ表情は表出者の援助要請を伝え，被表出者の接近行動を引き出す一方で（Mizokawa, Minemoto, Komiya, & Noguchi, 2013），怒り表情は表出者の攻撃準備を伝えるために被表出者の回避行動を引き出すことが知られている（Marsh, Ambady, & Kleck, 2005）。これらの知見を踏まえると，二者間の葛藤状況において，被害者の感情が加害者の行動選択に影響を与える可能性が考えられる。そこで研究 6 では，被害者がどのような感情表出を行っていても，これまでの研究で示されてきた関係の価値―謝罪コスト間の関係が一貫しているか否かを検証する。検討する感情については，葛藤場面で被害者が経験する可能性のあるネガティブな感情を網羅する。

また，研究 1 から 5 はいずれも大学生を対象としており，サンプルが限定されていた。よって研究 6 ではオンライン調査を用いることでサンプルを広げる。特に，サンプルが学生以外にまで広がることで，これまでの交換的関係としてきたアルバイト先の上司よりも，さらに自分の長期にわたる利益に関与する職場の人間という交換的関係にある相手を想起してもらうことが可能になる。そこで研究 6 では，想起した人間が共同的関係にあたる友人・恋人か，あるいは交換的関係にあたる職場の人間かで分け，それぞれの関係性で関係の価値－謝罪コスト間の関係を検討する。

7.2. 方法

7.2.1. 参加者

インターネットリサーチサービスを利用し，一般人を対象に回想法を用いたオンライン調査を行った。調査に参加したのは一般人 1143 名であった。ただし，特定の誰かをネガティブな気持ちにさせた最近の出来事についての記述を

求める欄で，特になしという回答をした 428 名，教示に従わない内容（たとえば，自分が傷ついた経験や，相手が特定の人間でない経験など）を記述した 29 名，逆転項目を含む質問項目での回答の全てが尺度の中点以外の特定の同じ数字になっていた 4 名，以上 461 名のデータは分析から除外した（有効回答数 682；男性 319 名，女性 363 名，20～86 歳，$M_{age} \pm SD = 41.53 \pm 13.82$）。

7.2.2. 調査デザイン・質問項目

調査では，参加者に，最近，特定の誰か（友人，恋人，配偶者，家族，職場の同僚・上司・部下，その他知り合い等）をネガティブな気持ちにしてしまった出来事（悲しませた，怒らせた，傷つけた，怖がらせた等）をひとつ想起させ，その出来事や相手についていくつかの質問に回答してもらった。まず，その出来事について簡単に記述させた後，その出来事は参加者が意図的に起こしたものなのか（3 項目：意図），そのときの言動を自分自身でコントロールできていたか（コントロール）をはいかいいえの 2 択でたずねた。次に，相手との関係を選択させるとともに（関係性：友人・恋人・配偶者・家族・職場の同僚，上司，部下・その他知り合い等），IOS を用いて主観的な近しさについても回答させた（親近感）。その後，9 つのネガティブな感情（悲しみ・怒り・嫌悪・驚き・恐怖・苦しみ・嫉妬・妬み・その他）を呈示し，参加者に相手が経験していたと思う感情を全て選択させた上で，選択したそれぞれの感情を相手はどの程度経験していたと思ったかを 5 件法で回答してもらった（相手の感情；選択されなかった：0，ほんの少しだけ感じていた：1～とても強く感じていた：5）。

参加者自身の感情経験については，SSGS を用いて罪悪感，恥，誇りを，Batson ら（2007）が作成した怒りの測定尺度の内の 3 項目を用いて怒りを，Batson, O'Quin, Fultz, Vanderplas, & Isen（1983）が作成した相手に対する共感の程度を測定する 6 項目を用いて情動的共感を，その出来事があった際にそれぞれどのくらい感じたか，5 件法で回答してもらった。それから，その出来事があった後に，参加者がその相手に対して，あるいは自分に対して，どのような行動をとったかを，列記した項目の中から全て選択させた。全項目の内，関係回復のための行動は Tabak ら（2012）の作成した Transgressor

Appeasement and Reconciliation Checklist の 19 項目を日本語訳したものであり，これまでの研究でのコストのかかっていない謝罪とコストのかかる謝罪に該当する行動の両方を含んでいる（融和行動）。また，2 項目は相手を励ます行動に関するものであった（励まし）。くわえて，6 項目は被害者に対する回避的な反応を（回避行動），3 項目は神仏に祈ったり，泣いたりしたかどうかといった反応（その他の行動）を測定するものであった。回避行動とその他の行動の項目は古川・森永（2013）が報告している罪悪感喚起時の加害者の反応分類一覧を参照に作成した。これらの項目については，特定の意図に関連する行動をどれだけとったかがその意図を実現するためにかけたコスト量を示すものとして扱う。例えば，融和行動に関する 19 項目の内，参加者がその出来事の後にとったと回答した項目数をカウントし，その合計数が多いほど，関係回復のためにコストをかけたということになる。その後，実際に自分が相手に謝ったかどうかによらず，もし謝らなかったとしても相手は許してくれたかどうか（許しへの期待），もしきちんと謝っていたら相手は許してくれたかどうか（条件付きの許しへの期待）をたずねた。

相手の関係の価値については，これまでの研究と異なり，研究 6 では一般人を対象にしているため，測定にあたって目標の設定を変更した。具体的には，呈示する目標を 8 つ（昇進・昇級・転職といった仕事での成功／今のアルバイトでうまくやることや新しいアルバイトを探すことといった副業での成功／個人の趣味／サークル・教室・ボランティア活動など／現在の関係を続けたり，新しい友人を作ったりするなどといった人間関係／新しい恋人を探したり，結婚のための活動をするなどといった恋愛関係／家庭を円満に維持するなどの家族関係／その他の目標）にし，各目標について該当しない場合（たとえば，恋愛関係の項目であれば，既に結婚／婚約をしていた場合）を除き，それぞれで役に立つ程度をこれまでと同じ 7 件法（とても邪魔になる：–3 ～ とても役に立つ：＋3）で評定してもらった。それらの項目については，評定された項目の合計値を評定された項目の数で割った値を関係の価値として用いた（α = .70）。

最後に，その出来事について，自分にどれだけ責任があると思うかを 10% 刻みの 11 段階で評定してもらい（過失の責任），調査を終了した。

7.3. 結果

7.3.1. 被害者との関係

ネガティブな気持ちにしてしまった特定の誰かとして，友人を回答した参加者は 89 名（13.05%），恋人だった参加者は 47 名（6.89%），配偶者は 147 名（21.55%），家族は 159 名（23.31%），職場の同僚は 77 名（11.29%），職場の上司は 68 名（9.97%），職場の部下は 52 名（7.62%），その他（知人・客など）は 43 名（6.30%）だった。

7.3.2. 相手の感情

相手が経験していたと思った感情として悲しみを選択した参加者は 344 名（全参加者中 50.44%）であり，怒りは 320 名（全参加者中 46.92%）であった。その他の感情を回答した参加者はいずれも 100 名を下回っていた（恐怖 61 名，苦しみ 81 名，軽蔑 62 名，嫉妬 11 名，ねたみ 24 名，不公平感 63 名，その他 65 名）。その他について，どのような感情であったかの記述をカテゴリー分けしたところ，最も多い不安で 6 名であり，項目として提示した 8 つのネガティブ感情を超える報告数ではなかった。以上から，葛藤状況における重要な感情として悲しみと怒りのふたつに着目し，仮説の検証を行った。

7.3.3. 仮説の検証

まず，相手との関係によらず，全参加者の融和行動と主要な変数との相関係数について Table 14 に示す（全変数間の相関係数については付録の Table 14b に示す）。融和行動は関係の価値と正の相関関係に（$r = .18$, $df = 680$, $p < .001$），許しへの期待とは負の相関関係にあり（$r = -.11$, $df = 680$, $p = .004$），これまでの研究と一致した結果であった。また，被害者の感情との関連については，悲しみを経験していると思った程度と融和行動が正の相関関係にあるのに対し（$r = .26$, $df = 680$, $p < .001$），怒りを経験していると思った程度と融和行動には関連が見られなかった（$r = .05$, $df = 680$, $p = .168$）。

Table 14 各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 6, N = 682）

	M (1 の割合)	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 融和行動（0～19）	2.10	2.17	—							
2. 性別（0 = 男性, 1 = 女性）	(.53)		.04	—						
3. 年齢	41.53	13.82	–.10*	–.06	—					
4. 関係の価値（–3～＋3）	0.48	0.99	.18***	.12**	.00	—				
5. 許しへの期待（1～4）	2.84	0.77	–.11**	.24**	.01	.33***	—			
6. 親近感（1～7）	3.12	2.06	.22***	.02	.01	.32***	.19***	—		
7. 罪悪感（1～5）	2.85	0.98	.34***	–.06+	–.08*	.12**	–.20***	.12**	—	
8. 被害者の怒り（0～5）	1.44	1.75	.05	–.02	–.01	–.14***	–.32***	–.04	.11**	—
9. 被害者の悲しみ（0～5）	1.45	1.66	.26***	.09*	–.14***	.07+	.08*	.23**	.16***	–.14***

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

- 38 -

また，これまでの研究と同様に，融和行動を目的変数とし，性別，関係の価値，許しへの期待，親近感（IOS），さらに一般人サンプルのため年齢を，新たな検討対象として被害者の怒り，悲しみを説明変数とした重回帰分析を行った（$F_{7, 674} = 18.37$, $p < .001$，調整済み $R^2 = .15$; Table 15）。その結果，被害者が表出している感情を統制しても，関係の価値が融和行動を促進し（$\beta = .19$, $p < .001$），許しへの期待が融和行動を抑制するという（$\beta = -.21$, $p < .001$），これまでと一貫した結果が得られた。

さらに，相手を友人・恋人と回答した 136 名を共同的関係のデータセットに（Table 16），相手を職場の同僚・上司・部下と回答した 197 名を交換的関係のデータセットに（Table 17）振り分けた。融和行動と関係の価値の間の相関について共同的関係，交換的関係ごとに確認すると，交換的関係では有意な正の相関関係にあるものの（$r = 21$, $df = 195$, $p = .003$），共同的関係では有意傾向にとどまった（$r = .16$, $df = 134$, $p = .062$）。

Table 15 融和行動を目的変数とした重回帰分析の結果（研究 6）

予測変数	共同的関係		交換的関係		全体	
	β	SE	β	SE	β	SE
性別 (0 = 男性, 1 = 女性)	.03	.081	.12^{+}	.069	.05	.037
年齢	–.07	.082	–.04	.068	–.06^{+}	.036
関係の価値	.19*	.080	.15*	.073	.19***	.039
許しへの期待	–.30***	.085	–.10	.079	–.21***	.040
親近感	.20*	.082	.17*	.073	.15***	.038
被害者の怒り	.12	.082	.17*	.074	.05	.038
被害者の悲しみ	.13	.085	.23**	.071	.23***	.037

共同的関係: $F_{7, 128} = 5.09$, $p < .001$, adjusted $R^2 = .18$

交換的関係: $F_{7, 189} = 5.70$, $p < .001$, adjusted $R^2 = .14$

全体: $F_{7, 674} = 18.37$, $p < .001$, adjusted $R^2 = .15$

$^{+} < .10$, $^{*} < .05$, $^{**} < .01$, $^{***} < .001$

Table 16 共同的関係における，各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 6, N= 136）

	M (1 の割合)	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 融和行動（0～19）	2.47	2.46	—							
2. 性別（0 = 男性, 1 = 女性）	(.53)		–.05	—						
3. 年齢	38.23	13.53	–.07	.21*	—					
4. 関係の価値（–3～＋3）	0.54	0.79	.16+	.04	.00	—				
5. 許しへの期待（1～4）	2.90	0.73	–.31***	.11	–.01	.13	—			
6. 親近感（1～7）	3.35	2.12	.21*	-.10	.01	.12	.11	—		
7. 罪悪感（1～5）	2.90	0.97	.36***	.01	.05	.16+	–.35***	.06	—	
8. 被害者の怒り（0～5）	1.26	1.72	.16+	–.01	.11	–.09	–.24**	–.02	.17+	—
9. 被害者の悲しみ（0～5）	1.68	1.66	.23**	–.16+	–.19*	–.05	–.22*	.20*	.19*	–.04

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 17 交換的関係における，各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 6, N= 197）

	M (1 の割合)	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 融和行動（0～19）	1.87	2.03	—							
2. 性別（0 = 男性, 1 = 女性）	(.37)		.13^{+}	—						
3. 年齢	41.71	13.03	–.07	–.17*	—					
4. 関係の価値（–3～＋3）	0.21	0.84	.21**	.14*	.00	—				
5. 許しへの期待（1～4）	2.65	0.75	–.02	.19**	–.13^{+}	.30***	—			
6. 親近感（1～7）	1.97	1.35	.25***	–.04	.07	.33***	.18*	—		
7. 罪悪感（1～5）	2.78	0.96	.30***	–.06	–.06	.23**	–.17*	.14*	—	
8. 被害者の怒り（0～5）	1.40	1.71	.15*	–.08	.00	–.05	–.41***	.01	.25***	—
9. 被害者の悲しみ（0～5）	0.94	1.38	.25**	.09	–.12^{+}	.12^{+}	.23**	.25**	.05	–.20**

$^{+}$ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

それぞれの関係性において，これまでの研究で示されてきた関係の価値—謝罪コスト間の関係と同様の関係が見られるかどうかを確認するために，各データセットを用いて重回帰分析を行った（共同的関係: $F_{7, 128} = 5.09$, $p < .001$, adjusted $R^2 = .18$; 交換的関係: $F_{7, 189} = 5.70$, $p < .001$, adjusted $R^2 = .14$; Table 15）。その結果，関係の価値の効果は相手の経験していた感情を統制したとしても，共同的関係でも（$\beta = .19$, $p = .017$），交換的関係でも（$\beta = .15$, $p = .044$），有意であることが示された。一方で，共同的関係ではこれまでの研究と同様に許しへの期待が高い場合には融和行動があまり行われないことが示されたが（$\beta = -.30$, $p < .001$），交換的関係では許しへの期待と融和行動の間に有意な関連は見られなかった（$\beta = -.10$, $p = .187$）。これは，交換的関係では相手の意図の推測が確かであるという確信が持ちにくく，相手が許してくれそうかどうかという期待を行動に反映できなかったためではないかと考えられる。以上から，被害者との関係がどのようなものであっても，関係の価値—融和行動間の関係は一貫しており，関係の価値が高い相手に対しては仲直りのための行動が促されることが分かった。

7.3.4. 補足的分析

Table 16, 17 で示したように，罪悪感得点と関係の価値，親近感との関連は関係の種類によって異なっていた。具体的には，共同的関係では，罪悪感得点と関係の価値の間の相関は有意傾向にとどまり（$r = .16$, $df = 134$, $p = .059$），親近感との有意な関連はみられない一方で（$r = .06$, $df = 134$, $p = .510$），交換的関係では罪悪感得点は関係の価値（$r = .23$, $df = 195$, $p = .001$），親近感（$r = .14$, $df = 195$, $p = .045$）の両方と有意な正の相関関係にあった。

そこで，それぞれの関係性のデータセットで，罪悪感を目的変数とし，性別，関係の価値，許しへの期待，親近感（IOS），年齢，被害者の怒り，悲しみを説明変数とした重回帰分析を行った（Table 18）。他の変数の影響を統制した結果，共同的関係では関係の価値が罪悪感を予測する一方で（$\beta = .22$, $p = .009$），親近感は予測しないことが示された（$\beta = .05$, $p = .572$; $F_{7, 128} = 4.51$, $p < .001$, adjusted $R^2 = .15$）。交換的関係でも同様の結果となり，関係の価値の主効果は有意であったが（$\beta = .27$, $p < .001$），親近感の主効果はみられな

かった（β = .07, p = .325; $F_{7, 189}$ = 5.54, p < .325, adjusted R^2 = .14）。これは，これまでの研究と一貫する結果である。

Table 18 罪悪感を目的変数とした重回帰分析の結果（研究 6）

予測変数	共同的関係		交換的関係		全体	
	β	SE	β	SE	β	SE
性別 (0 = 男性, 1 = 女性)	.05	.079	–.07	.069	–.04	.037
年齢	.05	.082	–.09	.069	–.06	.037
関係の価値	.22**	.083	.27***	.073	.18***	.040
許しへの期待	–.33***	.086	–.21**	.079	–.25***	.041
親近感	.05	.083	.07	.073	.08*	.039
被害者の怒り	.11	.083	.19*	.074	.08*	.038
被害者の悲しみ	.14	.086	.08	.071	.16***	.038

共同的関係: $F_{7, 128}$ = 4.51, p < .001, adjusted R^2 = .15

交換的関係: $F_{7, 189}$ = 5.54, p < .001, adjusted R^2 = .14

全体: $F_{7, 674}$ = 13.60, p < .001, adjusted R^2 = .12

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

8. 総合考察

研究 1，2，3 では，関係の価値と謝罪コストの関連について，関係の価値が高い相手に対してはそうでない相手のときよりも，謝罪にコストをかけてもよいと考えること，あるいは実際にそうしていたことを示してきた。これは，価値ある相手との間では仲直りが促されるという関係価値仮説と一貫するものである。研究 4，5 では，共同的関係，交換的関係，関係の形成期といった関係の質に注目し，関係の質によって関係の価値と謝罪コストの間の関連が異なることを明らかにした。研究 6 では，インターネット調査を用いることで一般人を含むサンプルへと拡大し，年齢や性別，社会的な状況によらず，関係の価値と謝罪コストの関連が一貫していることを示した。また，被害者となった相手が表出していた感情に着目し，それらが関係の価値と謝罪コストの関連を阻害しないことを明らかにした。

また，本研究では Nelissen（2014）で示された関係の価値と罪悪感の関連についても検討してきた。その結果，相手との関係の価値が高いものであるほど，相手を傷つけたりネガティブな気持ちにしたりしたときに，参加者は罪悪感を経験することが明らかになった。これは，関係の価値が仲直りへの動機づけを高めることを示唆するものであるといえる。

8.1. 本研究の限界

本研究におけるひとつ目の限界点として，いずれも自己報告に基づくデータであることがあげられる。本研究では，実験室ではじめて出会い，今後もう二度と会わないような相手ではなく，実際の友人関係や恋人関係，職場での関係といった，参加者にとって関係の継続を考えなければならない相手との仲直りプロセスを検討対象としている。このような今後も関係が続く相手との間に，実験的手続きによって実験室内で実際に葛藤を生じさせることは研究の倫理上難しいため，場面想定法や回想法という手続きを用い，自己報告に基づいたデータの収集を行っていた。しかし，実際の関係を対象とする場合でも，現実の葛藤場面を回想してもらい，その間に生理指標を測定するなどによって，自己報告のみに頼らないデータの収集は可能だろう。今後，本研究の仮説を検討

する際には，上述のような手続きを用いての生理指標の測定を行うことや，行動指標の測定が可能な手法を開発することが望まれる。

ふたつ目の限界点として，本研究は日本人を対象とした検討に留まっていることがあげられる。本研究の仮説の基礎となっている，価値の高い関係では仲直りが促されるという関係価値仮説と，コストリーシグナリングモデルのいずれもが，動物やヒトに共通である以上，関係の価値と謝罪コストの関連はヒトに普遍的なものだと考えられる。しかし謝罪のもつ効能や（大渕，2010），関係の流動性という人々が付き合う相手を変える程度は（Oishi, 2010），文化によって異なっていることがこれまでの研究で示されている。以上から，関係の価値と謝罪コストの関連について，国外でもデータの収集を行い，重ねて検討していく必要があると考えられる。

みっつ目に，本研究では関係の価値と謝罪コストの間を媒介する感情として罪悪感のみに注目している点があげられる。従来の謝罪についての研究では，謝罪する人間の経験している感情として罪悪感に注目するものが多い。しかし，罪悪感以外にも謝罪へ影響をおよぼす感情は存在するだろう。たとえば，Howell, Turowski, & Buro（2012）は謝罪に加害者の共感能力が影響することを示している。共感はこれまでにも罪悪感との関連がしばしば指摘されていることから（Hoffman, 1998; Leith & Baumeister, 1998），関係の価値と謝罪コストを罪悪感が媒介しているように，共感が関与している可能性も考えられる。以上から，共感，あるいはそれ以外のどのような感情が，関係の価値が高い相手との仲直りを促すように経験されているかについて，より詳しく検討していくことは有意義だろう。

8.2. まとめ

本研究は，仲直り行動について進化的側面から検証する研究の流れをくむものである。これまでの研究は，“価値の高い相手に対しては許しが促される”という被害者側からの検討に限られていた（e.g., Burnette et al., 2012）。しかし，仲直りが被害者と加害者の 2 者間でのやりとりに基づくものである以上，片側のみの知見ではそのプロセスを理解するには不十分である。そこで本研究

では関係価値仮説について，誠実な意図を伝える手段としての謝罪にかけるコストに着目し，加害者側でも“価値の高い相手に対しては謝罪が促される”か否かを検証した。その結果，加害者側でも関係価値仮説を支持することが示された。

本研究は，対人間の葛藤解決に関するこれまでの研究に対して，進化的観点から検討することで，加害者の葛藤後の行動を規定する要因について新たな知見を提供した。ただし本研究の対象は加害者と被害者という個人対個人の関係にとどまっている。今後は個人間のみならず、集団間，あるいは国際間葛藤の解決に貢献できる研究へ発展させることが望ましい。

9. 参考文献

Anderson, J. C., Linden, W., & Habra, M. E. (2006). Influence of apologies and trait hostility on recovery from anger. *Journal of Behavioral Medicine*, *29*, 347-359.

Aron, A., Aron E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, *63*, 596-612.

Batson, C. D., Kennedy, C. L., Nord, L.-A., Stocks, E. L., Fleming, D. Y. A., Marzette, C. M., Lishner, D. A., Hayes, R. E., Kolchinsky, L. M., & Zerger, T. (2007). Anger at unfairness: Is it moral outrage? European Journal of Social Psychology, *37*, 1272–1285.

Batson, C. D., O'Quin, K., Fultz, J., Vanderplas, M., & Isen, A. M. (1983). Influence of self-reported distress and empathy on egoistic versus altruistic motivation to help. *Journal of Personality and Social Psychology*, *45*, 706-718.

Baumeister, F., Stillwell, A. M., & Heatherton, T. F. (1994). Guilt: An interpersonal approach. *Psychological Bulletin*, *115*, 243-267.

Bliege Bird, R. & Smith, E. A. (2005). Signaling theory, strategic interaction, and symbolic capital. *Current Anthropology*, *46*, 221-248.

Bornstein, B. H., Lahana, M. R., & Miller, M. K. (2002). The effects of defendant remorse on mock juror decisions in a malpractice case. *Behavioral Sciences and The Law*, *20*, 393–409.

Bottom, W. P., Gibson, K., Daniels, S. E., & Murnighan, J. K. (2002). When talk is not cheap: Substantive penance and expressions of intent in rebuilding cooperation. *Organization Science*, *13*, 497-513.

Burnette, J. L., McCullough, M. E., Van Tongeren, D. R., & Davis, D. E. (2012). Forgiveness results from integrating information about relationship value and exploitation risk. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *38*, 345-465.

Clark, M. S., & Mills, J. (1979). Interpersonal attraction in exchange and communal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, *37*, 12-24.

Darby, B. W., & Schlenker, B. R. (1982). Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, *43*, 742-753.

Darley, J.M., & Pittman, T. S. (2003). The psychology of compensatory and retributive justice. *Personality and Social Psychology Review*, *7*, 324-336.

De Cremer, D. (2010). To pay or to apologize? On the psychology of dealing with unfair offers in a dictator game. *Journal of Economic Psychology*, *31*, 843-848.

de Waal, F. B. M. (2000). Primates—A natural heritage of conflict resolution. *Science*, *289*, 586-590.

de Waal, F. B. M., & Pokorny, J. J. (2005). Primate conflict and its relation to human forgiveness. In E. L. Worthington (Ed.), *Handbook of forgiveness* (pp. 17–32). New York: Brunner-Routledge.

Desmet, P. T.M., De Cremer, D., & van Dijk, E. (2010). On the psychology of financial compensation to restore fairness transgression:When intentions determine value. *Journal of Business Ethics*, *95*, 105-115.

Desmet, P. T.M., De Cremer, D., & van Dijk, E. (2011). Trust recovery from voluntary or forced financial compensation in the trust game: The role of trait forgiveness. *Personality and Individual Differences*, *51*, 267-273.

Exline, J. J., & Baumeister, R. F. (2000). Expressing forgiveness and repentance. Benefits and barriers. In M. E. McCullough, K. I. Pargament, & C. E. Thoresen (Eds.), *Forgiveness: Theory, research, and practice* (pp. 133–155). New York: Guilford Press.

Exline, J. J., Deshea, L., & Holeman, V. T. (2007). Is apology worth the risk? Predictors, outcomes, and ways to avoid regret. Journal of

Social and Clinical Psychology, *26*, 479-504.

Fehr, R., & Gelfand,M. J. (2010).When apologieswork: Howmatching apology components to victims' self-construals facilitates forgiveness. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, *113*, 37-50,

Fehr, R., Gelfand, M. J., & Nag, M. (2010). The road to forgiveness: A meta-analytic synthesis of its situational and dispositional correlates. *Psychological Bulletin*, *136*, 894-914.

Fitzsimons, G.M., & Shah, J. Y. (2008). How goal instrumentality shapes relationship evaluations. *Journal of Personality and Social Psychology*, *95*, 319-337.

古川善也・森永康子 (2013). 人は罪悪感を感じた時に何をするか―罪悪感喚起状況別の分類― 広島大学心理学研究, *13*, 61-68.

Goffman, E. (1967). *Interaction ritual*. England: Oxford Aldine

Gold, G., & Davis, J. (2005). Psychological determinants of forgiveness: An evolutionary perspective. *Humboldt Journal of Social Relations*, *29*, 111–134.

Gold, G. J., & Weiner, B. (2000). Remorse, confession, group identity, and expectancies about repeating a transgression. *Basic and Applied Social Psychology*, *22*, 291–300.

Gonzales, M. H., Pederson, J. H., Manning, D. J., & Wetter, D. W. (1990). Pardon my gaffe: Effects of sex, status, and consequence severity on accounts. *Journal of Personality and Social Psychology*, *58*, 610-621.

Henrich, J. (2009). The evolution of costly displays, cooperation and religion: Credibility enhancing displays and their implications for cultural evolution. *Evolution and Human Behavior*, *30*, 244-260.

Hodgins, H. S., & Liebeskind, E. (2003). Apology versus defense: Antecedents and consequences. *Journal of Experimental Social Psychology*, *39*, 297-316.

Hoffman, M. L. (1998). Varieties of empathy-based guilt. In J. Bybee, J. Bybee (Eds.), *Guilt and children* (pp. 91-112). San Diego, CA: Academic Press.

Howell, A. J., Turowski, J. B., & Buro, K. (2012). Guilt, empathy, and apology. *Personality and Individual Differences*, *53*, 917-922.

John, O. P. & Benet-Martinez, V. (2000). Measurement: Reliability, construct validation, and scale construction. In H. T. Reis & C. M. Judd (Eds), *Handbook of research methods in social and personality psychology* (pp. 339-369). New York: Cambridge University Press.

Keltner, D., & Haidt, J. (1999). The social functions of emotions at four levels of analysis. *Cognition and Emotion*, *13*, 505-522.

Leith, K. P., & Baumeister, R. F. (1998). Empathy, shame, guilt, and narratives of interpersonal conflicts: Guilt-prone people are better at perspective taking. *Journal of Personality*, *66*, 1-37.

Lydon, J. E., Jamieson, D.W., & Holmes, J. G. (1997). The meaning of social interactions in the transition from acquaintanceship to friendship. *Journal of Personality and Social Psychology*, *73*, 536-548.

Marsh, A. A., Ambady, N., & Kleck, R. E. (2005). The Effects of Fear and Anger Facial Expressions on Approach- and Avoidance-Related Behaviors. *Emotion*, *5*, 119-124.

McCullough, M. E. (2008). *Beyond revenge: The evolution of the forgiveness instinct*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.

McCullough, M. E., Fincham, F. D., & Tsang, J. A. (2003). Forgiveness, forbearance and time: The temporal unfolding of transgression related interpersonal motivations. *Journal of Personality and Social Psychology*, *84*, 540–557.

McCullough, M. E., Kurzban, R., & Tabak, B. A. (2013). Cognitive systems for revenge and forgiveness. *Behavioral and Brain Sciences*, 36, 1-58.

McCullough, M. E., Luna, L. R., Berry, J. W., Tabak, B. A., & Bono, G. (2010). On the form and function of forgiving: Modeling the time-forgiveness relationship and testing the valuable relationships hypothesis. *Emotion, 10*, 358-376.

McCullough, M. E., Worthington, E. J., & Rachal, K. C. (1997). Interpersonal forgiving in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 321-336.

Mizokawa, A., Minemoto, K., Komiya, A., & Noguchi, M. (2013). The effects of infants' and adults' facial expressions on approach-avoidance behavior. *Psychologia*, *56*, 33-44.

Nelissen, R. M. A. (2014). Relational utility as a moderator of guilt in social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, *106*, 257-271.

Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. (1989). Apology as aggression control: Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, *56*, 219-227.

Ohbuchi, K., & Sato, K. (1994). Children's Reactions to Mitigating Accounts: Apologies, Excuses, and Intentionality of Harm. *Journal of Social Psychology*, *134*, 5-17.

Ohtsubo, Y., Matsumura, A., Noda, C., Sawa, E., Yagi, A., & Yamaguchi, M. (2014). It's the attention that counts: Interpersonal attention fosters intimacy and social exchange. *Evolution and Human Behavior*, *35*, 237–244.

Ohtsubo, Y., & Watanabe, E. (2009). Do sincere apologies need to be costly? Test of a costly signaling model of apology. *Evolution and Human Behavio*r, *30*, 114-123.

Ohtsubo, Y., Watanabe, E., Kim, J., Kulas, J. T., Muluk, H., Nazar, G., Wang, F., & Zhang, J. (2012). Are costly apologies universally perceived as being sincere?: A test of the costly apology-perceived sincerity relationship in seven countries. *Journal of Evolutionary*

Psychology, *10*, 187-204.

Oishi, S. (2010). The Psychology of Residential Mobility: Implications for the Self, Social Relationships, and Well-Being. *Perspectives on Psychological Science*, *5*, 5-21.

大渕憲一 (2010). 謝罪の研究-釈明の心理とはたらき　東北大学出版会

Roberts, W., Strayer, J., & Denham, S. (2014). Empathy, anger, guilt: Emotions and prosocial behaviour. *Canadian Journal of Behavioural Science / Revue Canadienne des Sciences du Comportement*, *46*, 465-474.

Schmitt, M., Gollwitzer, M., Förster, N., & Montada, L. (2004). Effects of objective and subjective account components on forgiving. *The Journal of Social Psychology*, *144*, 465–485.

Schweitzer, M. E., Hershey, J. C., & Bradlow, E. T. (2006). Promises and lies: Restoring violated trust. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, *101*, 1-19.

Skarlicki, D. P., Folger, R., & Gee, J. (2004). When social accounts backfire: The exacerbating effects of a polite message or an apology on reactions to an unfair outcome. *Journal of Applied Social Psychology*, *34*, 322-341.

Tabak, B. A., McCullough, M. E., Luna, L. R., Bono, G., & Berry, J. W. (2012). Conciliatory gestures facilitate forgiveness and feelings of friendship by making transgressors appear more agreeable. *Journal of Personality*, *80*, 503-536.

Takaku, S. (2001). The effects of apology and perspective taking on interpersonal forgiveness: A dissonance–attribution model of interpersonal forgiveness. *The Journal of Social Psychology*, *141*, 494–508.

Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and guilt*. New York: Guilford.

Tavuchis, T. (1991). Mea culpa: *A sociology of apology and reconciliation.*

Stanford: California Stanford University Press.

Verbeek, P., & de Waal, F. B. M. (2001). Peacemaking among preschool children. *Peace and Conflict: Journal of Peace Psychology*, *7*, 5-28.

Weiner, B., Graham, S., Peter, O., & Zmuidinas, M. (1991). Public confession and forgiveness. *Journal of Personality*, *59*, 281–312.

Zahavi, A. & Zahavi, A. (1997). *The handicap principle: A missing piece of Darwin's puzzle*. New York: Oxford University Press.
(ザハヴィ, A.・ザハヴィ, A. 大貫昌(訳) (2001). 生物進化とハンディキャップ原理―性選択と利他行動の謎を解く 白揚社)

Zechmeister, J. S., Garcia, S., Romero, C., & Vas, S. N. (2004). Don't apologize unless you mean it: A laboratory investigation of forgiveness and retaliation. *Journal of Social and Clinical Psychology*, *23*, 532-564.

I.　付録 a

研究 1 から研究 6 までの，全変数についての，平均値，標準偏差，信頼性係数および相関係数の表

1　研究 1－Table 1b.....55

2　研究 2－Table 3b.....56

3　研究 3－Table 5b.....57

4　研究 4－Table 7b.....58

5　研究 5－Table 12b.....59

6　研究 6－Table 14b: 1～14 行.....60

15～29 行.....61

Table 1b 各変数の平均値，標準偏差，信頼性係数，および変数間の相関係数（研究 1, N= 529）

	M (1 の割合)	SD	α	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 謝罪コスト（1〜4）	1.86	0.68	.79	—										
2. 性別 (0 = 男性, 1 = 女性)	(.55)			.17***	—									
3. 親近感 (0 = 普通の友人, 1 = 親友)	(.50)			.15**	−.02	—								
4. シナリオ (0 = 秘密, 1 = 待ち合わせ)	(.51)			.19***	.04	.01	—							
5. 関係の価値（–3〜+3）	0.80	0.72	.70	.20***	.09*	.34***	.06	—						
6. 罪悪感（1〜5）	3.95	0.93	.86	.40***	.28***	.05	.20***	.10*	—					
7. 恥（1〜5）	3.29	0.91	.79	.35***	.28***	.05	.23***	.11**	.80***	—				
8. 誇り（1〜5）	1.51	0.57	.78	.00	–.27***	.01	–.03	–.02	–.29***	–.27***	—			
9. 許しへの期待（1〜4）	2.55	0.68		–.08	–.10*	.19***	–.18***	.05	–.23***	–.26***	.11**	—		
10. 条件付きの許しへの期待（1〜4）	3.41	0.60		.04	.02	.21***	.11*	.15**	–.06	–.07	–.01	.35***	—	
11. 不信感（1〜4）	2.54	0.67		.16***	.12**	–.15**	–.03	–.09*	.32***	.27***	–.16***	–.41***	–.22***	—
12. 関係継続の危機（1〜4）	2.12	0.78		.22***	.09*	–.17***	.14**	–.06	.25***	.26***	–.09*	–.47***	–.30***	.53***

$^{+}$ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 3b 各変数の平均値、標準偏差、信頼性係数、および変数間の相関係数（研究 2, N= 311）

	M (1 の割合)	SD	α	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1. 謝罪コスト（1～4）	2.60	0.73	.54	–																
2. コストのかからない謝罪 (1～4)	3.83	0.46		.18**	–															
3. 性別 (0 = 男性, 1 = 女性)	(.39)			.13*	.15**	–														
4. 親近感 (0 = 普通の友人, 1 = 親友)	(.51)			.10+	.11+	.05	–													
5. 親近感 - IOS (1～7)	3.35	1.68		.16**	.18**	.10+	.33***	–												
6. シナリオ (0 = 破損, 1 = 待ち合わせ)	(.50)			.35***	–.02	–.01	.00	–.02	–											
7. 関係の価値（–3～＋3）	0.66	0.80	.79	.21***	.13*	.12*	.28***	.41***	.00	–										
8. 罪悪感（1～5）	3.77	0.92	.79	.34***	.26***	.22***	.05	.08	.35***	.17**	–									
9. 恥（1～5）	3.18	0.89	.75	.38***	.20***	.17**	.00	.03	.21***	.14*	.76***	–								
10. 誇り（1～5）	1.56	0.58	.75	–.13*	–.37***	–.20***	–.01	–.05	–.15**	–.03	–.35***	–.24***	–							
11. 釈明（1～4）	3.13	0.85		.14*	.22***	.09	.07	.04	–.13*	.14*	.07	.13*	.01	–						
12. 卑下（1～4）	1.98	0.92		.03	–.20***	.11*	–.01	–.11+	–.21***	–.04	–.03	.01	.23***	.09	–					
13. 恥の表出（1～4）	2.66	0.92		.19***	.16**	.14*	–.09+	–.06	.09	.07	.29***	.31***	–.09+	.13*	.10+	–				
14. 過失の回避（1～4）	2.63	1.06		.44***	.10+	.01	.06	.16**	.35***	.20***	.28***	.23***	–.10+	.03	–.11+	.08	–			
15. 不信感（1～4）	2.14	0.68		.21***	.08	.05	–.18**	–.14*	.05	.07	.31***	.44***	–.12*	.10+	.01	.20***	.12*	–		
16. 関係継続の危機（1～4）	2.15	0.85		.21***	.00	.14*	–.17**	–.13*	.12*	.00	.19***	.28***	–.12*	.10+	.05	.09	.16**	.43***	–	
17. 許しへの期待（1～4）	2.62	0.70		–.18**	–.03	–.02	.09	.08	–.20**	–.02	–.25***	–.25***	.14*	–.03	.04	–.04	–.23***	–.37***	–.36***	–
18. 条件付きの許しへの期待(1～4)	3.42	0.64		.03	.28***	.13*	.23***	.29***	–.11+	.21***	.01	–.04	–.14*	.11*	–.09	.02	–.03	–.31***	–.29***	.34***

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 5b 各変数の平均値，標準偏差，信頼性係数，および変数間の相関係数（研究 3, N= 190）

	M (1 の割合)	SD	α	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1. 謝罪コスト（ダメージの修復をしなかった = 0, 場合によってはした = 0.5, した = 1）	0.38	0.44		—																			
2. 3 項目を合成した場合の謝罪コスト（0～1）	0.16	0.21	.44	.81***	—																		
3. 2 項目を合成したコストのかからない謝罪（0～1）	0.84	0.35		.21**	.20**	—																	
4. 性別 (0 = 男性, 1 = 女性)	(.44)	0.50		–.03	–.05	.11	—																
5. 親近感（1 = 知人，2 = 普通の友人, 3 = 親友・恋人）	1.62	0.77		.20**	.26**	.09	.04	—															
6. 親近感 - IOS (1～7)	2.57	1.64		.21**	.35***	.13^{+}	–.05	.72***	—														
7. 関係の価値（–3～+3）	0.33	0.81	.69	.13^{+}	.13^{+}	.09	.03	.07	.16*	—													
8. 罪悪感（1～5）	2.91	1.09	.89	.30***	.35***	.25***	.07	.07	.16*	.16*	—												
9. 恥（1～5）	2.63	1.06	.85	.19**	.20**	.15*	.15	–.13^{+}	.04	.00	.77***	—											
10. 釈明（1～4）	0.58	0.47		.17**	.25**	.19**	–.07	.15*	.12	–.04	.13^{+}	.05	—										
11. 卑下（1～4）	0.12	0.30		.19**	.28***	–.07	–.10	.25***	.23**	.17*	.12^{+}	.01	.13^{+}	—									
12. 恥の表出（1～4）	0.58	0.48		.07	.03	.20**	–.09	–.16*	–.14^{+}	.13^{+}	.21**	.21**	–.04	.11	—								
13. 不信感（1～4）	2.41	0.75		–.05	–.01	–.15*	.06	.00	.00	–.23**	.19**	.25***	.14^{+}	.01	–.07	—							
14. 被害者の怒り（1～4）	2.59	0.82		–.06	–.04	–.05	.02	.03	.04	–.34***	.04	.11	.05	–.02	–.08	.56***	—						
15. 被害者の苛立ち（1～4）	2.79	0.82		.03	.11	–.04	.02	.09	.17*	–.28***	.13^{+}	.22**	–.03	.02	–.04	.54***	.75***	—					
16. 関係継続の危機（1～4）	1.63	0.87		.04	.09	–.22**	–.08	.06	.08	–.18*	.05	.11	.01	.08	–.22**	.62***	.46***	.42***	—				
17. 許しへの期待（1～4）	2.36	0.80		–.08	–.09	–.10	.09	.12	.03	.29**	–.17*	–.28**	–.18*	.11	.05	–.49***	–.47***	–.43***	–.47***	—			
18. 過失の深刻さ（1～4）	2.22	0.90		.13^{+}	.18*	.23**	–.01	–.03	.10	.09	.66***	.53***	.08	.08	.11	.28***	.09	.19**	.10	–.24***	—		
19. 過失後の親近感	1.51	0.74		.22**	.31***	.12^{+}	.01	.81***	.60***	.18*	.09	–.14*	.11	.27**	–.04	–.16*	–.06	–.01	–.20**	.27***	–.06	—	
20. 過失後の親近感 - IOS	2.33	1.64		.23**	.33***	.15*	–.07	.51***	.67***	.35***	.17*	–.01	.02	.19**	–.05	–.21**	–.14^{+}	–.04	–.21**	.23**	.03	.69***	—
21. 関係の断絶 (0 = していない, 1 = した)	(.90)	0.30		–.05	–.07	–.35***	–.09	–.02	.00	–.17*	–.12	–.06	–.08	–.07	–.21**	.47***	.38***	.30***	.58***	–.35***	.04	–.23**	–.26***

$^{+}$ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 7b 各変数の平均値，標準偏差，信頼性係数，および変数間の相関係数（研究 4, $N = 224$）

	M (1 の割合)	*SD*	α	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. 謝罪コスト（ダメージの修復をしなかった = 0, 場合によってはした = 0.5, した = 1）	0.58	0.47		—											
2. 3 項目を平均した場合の謝罪コスト（0〜1）	0.30	0.26	.44	.72***	—										
3. コストのかからない謝罪（0〜1）	0.74	0.34	.57	.24***	.32***	—									
4. 性別（0 = 男性, 1 = 女性）	(.45)	0.50		.04	–.11	.05	—								
5. 親近感 - IOS (1〜7)	4.29	1.71		.04	.06	.16	.00	—							
6. 関係の価値（–3〜+3）	0.67	0.99	.80	.04	.02	.20	.01	.18**	—						
7. 卑下（1〜4）	0.20	0.37		.05	.19**	.21**	–.06	–.03	.05	—					
8. 恥の表出（1〜4）	0.44	0.48		.23***	.20**	.23***	.14*	.08	.17*	.07	—				
9. 不信感（1〜4）	2.15	0.80		.05	.08	.09	.01	–.21**	–.08	.04	.12+	—			
10. 関係継続の危機（1〜4）	1.57	0.77		.04	.06	–.09	.01	–.17*	–.23***	–.02	.06	.59***	—		
11. 許しへの期待（1〜4）	2.63	0.83		–.09	–.22**	–.15*	.03	.07	.15*	–.01	–.11+	–.40***	–.38***	—	
12. 過失の責任（1〜4）	2.52	2.54		–.03	–.10	–.19**	.18**	–.07	–.26***	.00	–.15*	–.08	.17*	.03	—
13. 過失後の親近感 - IOS	3.97	1.95		.04	.03	.26***	.01	.75***	.31	.08	.05	–.29***	–.41***	.19**	–.18**

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 12b 各変数の平均値，準偏差，信頼性係数，および変数間の相関係数（研究 5, N= 125）

	M (1 の割合)	SD	α	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 謝罪コスト（1〜4）	2.16	0.60	.63	—									
2. 性別（0 = 男性, 1 = 女性）	(.55)	0.49		.12	—								
3. 親近感-IOS（1〜7）	5.04	0.96		.08	.02	—							
4. 関係の価値（–3〜+3）	0.98	0.60	.50	.10	.13	.27**	—						
5. 罪悪感（1〜5）	4.27	0.77	.80	.01	.20*	–.12	.21*	—					
6. 恥（1〜5）	3.71	0.82	.72	.11	.23**	–.09	.12	.72***	—				
7. 誇り（1〜5）	1.52	0.51	.72	.03	–.21*	.01	–.13	–.36***	–.41***	—			
8. 許しへの期待（1〜4）	2.35	0.60		.04	.03	.19*	.16+	–.01	–.06	.05	—		
9. 条件付きの許しへの期待（1〜4）	3.29	0.59		–.11	.09	.05	.13	.14	–.08	–.21*	.28**	—	
10. 信頼（1〜4）	2.38	0.59		–.03	–.09	.38***	–.02	–.23**	–.21**	.19*	.21*	.05	—
11. 関係継続の危機（1〜4）	2.59	0.78		–.11	.04	.29**	–.03	–.06	–.16+	.10	.21*	.20*	.44***

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 14b 各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 6, N = 682）：1～14

	M (1 の割合)	SD	α	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1. 融和行動（0～19）	2.10	2.17		—													
2. 性別（0 = 男性、1 = 女性）	(.47)	0.50		.04	—												
3. 年齢	41.53	13.82		–.10*	–.06	—											
4. 結婚（0 = 未婚, 1 = 既婚）	(.40)	0.49		–.02	.02	.47***	—										
5. 子供（0 = いる, 1 = いない）	(.47)	0.50		.05	–.03	–.49***	–.76***	—									
6. 関係の価値（–3～+3）	0.48	0.99	.84	.18***	.12**	.00	.11**	–.14***	—								
7. 親近感（1～7）	3.12	2.06		.22***	.02	.01	.18***	–.15***	.32***	—							
8. 過失の意図性（1～4）	0.36	0.28	.41	–.15***	.03	–.01	.04	–.04	–.13***	–.01	—						
9. 過失のコントロール性（1～4）	0.60	0.49		.07+	.04	–.12**	–.03	.04	.07+	.07+	.00	—					
10. 被害者の悲しみ（0～5）	1.45	1.66		.26***	.09*	–.14***	.01	.01	.07+	.23***	.06+	.07	—				
11. 被害者の怒り（0～5）	1.44	1.75		.05	–.02	–.01	.01	.00	–.14***	–.04	–.04	.06+	–.14***	—			
12. 被害者の恐怖（0～5）	0.27	0.94		.03	.02	–.01	.00	–.01	–.13***	.05	.09*	–.01	.05	–.15***	—		
13. 被害者の苦しみ（0～5）	0.37	1.10		.15***	.01	.01	.03	–.03	.02	.04	.07+	–.05	.17***	–.07+	.11**	—	
14. 被害者の軽蔑（0～5）	0.28	0.96		.10**	–.06+	.02	–.05	.01	–.09*	–.03	–.03	–.04	–.03	.23***	–.06	.08*	—
15. 被害者の嫉妬（0～5）	0.06	0.52		.13***	.01	.02	.00	.00	.01	.06	–.04	–.02	.06	.07	–.03	.02	.05
16. 被害者のねたみ（0～5）	0.12	0.66		.01	.01	.05	.01	–.03	.03	–.02	–.04	.01	–.03	.12**	–.01	.10**	.12**
17. 被害者の不公平感（0～5）	0.26	0.87		.02	–.04	.06	.05	–.07+	.05	–.05	.01	–.01	–.06	.00	–.07+	.00	.07+
18. 被害者のその他の感情（0～5）	0.29	0.99		.00	.04	.07+	.00	.02	.11**	.08*	.01	–.11**	–.14***	–.19***	–.04	–.09*	–.08*
19. 加害者の共感（1～5）	2.67	0.83	.83	.26***	–.09*	.15***	.10**	–.13***	.32***	.25***	–.11**	.02	.18***	–.14***	–.06	.12**	–.08*
20. 加害者の怒り（1～5）	2.98	1.16	.85	–.13***	.02	.02	.05	–.04	–.18***	.01	.12**	.07+	–.03	.18***	.08*	.02	.10**
21. 加害者の罪悪感（1～5）	2.85	0.98	.86	.34***	–.06+	–.08*	–.04	.03	.12**	.12**	–.15***	.15***	.16***	.11**	–.07+	.07+	.17***
22. 加害者の恥（1～5）	2.53	0.96	.85	.23***	–.15***	–.04	–.08*	.05	.05	.05	–.12**	.06	.05	.13***	–.10**	.05	.24***
23. 加害者の誇り（1～5）	1.95	0.83	.76	–.21***	–.25***	.10*	.02	–.04	–.04	–.04	.03	.01	–.19***	.02	–.01	.04	–.01
24. 励まし行動（0～2）	0.14	0.43		.21***	.04	.02	.05	–.05	.14***	.08*	.02	.00	.15***	–.16***	.13***	.17***	–.09*
25. 回避行動（0～5）	0.19	0.52		.05	.06	.01	.04	–.01	–.11**	–.05	–.02	–.02	–.05	.11**	.00	.05	.17***
26. その他の行動（0～3）	0.16	0.45		.27***	.08*	–.01	–.02	.02	–.05	.03	–.06	.00	.21***	.00	.01	.12***	.09*
27. 許しへの期待（1～4）	2.84	0.77		–.11**	.24***	.01	.07+	–.06	.33***	.19***	.06	.06	.08*	–.32***	–.01	.02	–.17***
28. 条件付きの許しへの期待（1～4）	3.16	0.74		.11**	.21***	–.05	.04	–.01	.37***	.26***	–.04	.12**	.10**	–.23***	–.01	.02	–.09*
29. 過失の責任（0～10）	6.06	3.15		.26***	–.03	–.06	–.03	.05	.19***	.16***	–.19***	.05	.09	.05	–.09*	–.09*	.01

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

Table 14b 各変数の平均値，標準偏差，および変数間の相関係数（研究 6, N = 682）：15〜29

	M (1 の割合)	SD	α	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
1. 融和行動（0〜19）	2.10	2.17													
2. 性別（0 = 男性、1 = 女性）	(.47)														
3. 年齢	41.53	13.82													
4. 結婚（0 = 未婚, 1 = 既婚）	(.40)														
5. 子供（0 = いる, 1 = いない）	(.47)														
6. 関係の価値（–3〜+3）	0.48	0.99	.84												
7. 親近感（1〜7）	3.12	2.06													
8. 過失の意図性（1〜4）	0.36	0.28	.41												
9. 過失のコントロール性（1〜4）	0.60	0.49													
10. 被害者の悲しみ（0〜5）	1.45	1.66													
11. 被害者の怒り（0〜5）	1.44	1.75													
12. 被害者の恐怖（0〜5）	0.27	0.94													
13. 被害者の苦しみ（0〜5）	0.37	1.10													
14. 被害者の軽蔑（0〜5）	0.28	0.96													
15. 被害者の嫉妬（0〜5）	0.06	0.52		—											
16. 被害者のねたみ（0〜5）	0.12	0.66		.14***	—										
17. 被害者の不公平感（0〜5）	0.26	0.87		–.04	.18***	—									
18. 被害者のその他の感情（0〜5）	0.29	0.99		–.04	–.05	–.01	—								
19. 加害者の共感（1〜5）	2.67	0.83	.83	–.03	–.02	.01	.04	—							
20. 加害者の怒り（1〜5）	2.98	1.16	.85	.01	.04	.05	–.06	–.24***	—						
21. 加害者の罪悪感（1〜5）	2.85	0.98	.86	.02	–.02	–.04	–.13	.42***	–.02	—					
22. 加害者の恥（1〜5）	2.53	0.96	.85	.04	–.03	–.03	–.10	.39***	.05	.80***	—				
23. 加害者の誇り（1〜5）	1.95	0.83	.76	–.05	.15***	.01	.02	.22***	.19***	–.02	.14***	—			
24. 励まし行動（0〜2）	0.14	0.43		.06	.08*	–.03	.01	.19***	–.03	–.05	–.08	–.03	—		
25. 回避行動（0〜5）	0.19	0.52		.02	.13***	.04	.07+	–.16***	.17***	.00	.07+	–.03	–.03	—	
26. その他の行動（0〜3）	0.16	0.45		.05	.01	.00	.02	.07+	.00	.22***	.23***	–.16***	.02	.25***	—
27. 許しへの期待（1〜4）	2.84	0.77		–.02	–.03	–.07+	.13	.12**	–.14***	–.20***	–.25***	–.06	.12**	–.08*	–.07+
28. 条件付きの許しへの期待（1〜4）	3.16	0.74		–.04	–.07+	–.03	.11	.15***	–.16***	–.06	–.16***	–.14***	.14***	–.09*	–.06
29. 過失の責任（0〜10）	6.06	3.15		.01	–.06	–.09*	–.06	.33***	–.45***	.45***	.36***	–.17***	–.06	–.15***	.07+

+ < .10, * < .05, ** < .01, *** < .001

II. 付録 b　研究 1～5 で用いた質問紙および研究 6 で用いた質問項目

1　研究 1－場面想定法

1.1　表紙－年齢・性別.....63

1.2　親近感の操作：親友条件（研究 1, 2 で共通）.....64

親近感の操作：普通の友人条件（研究 1, 2 で共通）.....65

1.3　関係の価値の測定（研究 1～5 で共通）.....66

1.4　過失シナリオ：待ち合わせシナリオ, 秘密シナリオ.....67

1.5　罪悪感の測定（SSGS; 研究 1, 2, 5 で共通）.....68

1.6　謝罪コストの測定（研究 1, 5 で共通）.....69

1.7　許しへの期待の測定（研究 1, 2, 5 で共通）.....70

2　研究 2－場面想定法

2.1　過失シナリオ：待ち合わせシナリオ（改訂版）, 秘密シナリオ.....71

2.2　謝罪コストの測定.....72

3　研究 3－回想法

3.1　相手を怒らせた実際の出来事の記述.....73

3.2　親近感の測定（回想法版）.....74

3.3　許しへの期待の測定.....75

3.4　罪悪感の測定（SSGS 短縮版）.....76

3.5　謝罪コストの測定（回想法版; 研究 3, 4 で共通）.....77

3.6　過失後の親近感の測定.....78

4　研究 4－回想法

4.1　相手を怒らせた実際の出来事の記述（友人・恋人限定版）.....79

4.2　親近感の測定（友人・恋人限定版）・許しへの期待の測定（短縮版）.....80

4.3　（謝罪コストの測定 3.5 と共通）・過失後の親近感の測定（短縮版）.....81

5　研究 5－場面想定法

5.1　親近感の操作：関係の形成期にある友人版.....82

5.2　過失シナリオ：待ち合わせシナリオ.....83

6　研究 6－回想法・オンライン調査

6.1　相手をネガティブな気持ちにしてしまった出来事の記述・質問.....84

6.2　親近感の測定（オンライン調査版）.....85

6.3　相手の経験した感情についての質問・測定.....86

6.4　参加者が経験した感情の測定（SSGS, 共感 6 項目, 怒り 3 項目）.....88

6.5　融和行動の測定.....89

6.6　許しへの期待の測定（短縮版）.....90

6.7　関係の価値の測定（オンライン調査版）.....91

Bb

社会的判断に関する調査

この質問紙では、特定の友人との間に架空の出来事が起こったと想定してもらい、その場面でどう感じるか、またそれにどう対処するかをおうかがいします。

上記の内容についてご理解いただけましたら、以下に年齢と性別を記入し、回答を始めてください。

性別：男・女

年齢：_____才

あなたの友人の中で、特に大事な同性の友人を１人選び、以下の友人のイニシャル欄にその人のイニシャルを記入してください。より具体的には、あなたの大事な友人を５人あげてくださいと言われたときには必ずその中にはいるような友人を１人選んでください。

友人のイニシャル：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

上でイニシャルを記入していただいた友人についてお聞きします。

1. その友人は、同じ大学に通っている人ですか？

はい　／　いいえ

2. その友人とあなたは、知り合ってから今までどれくらいのつきあいですか。以下の下線部分にその期間を記入してください。正確に覚えていない場合もおおよそでよいので～年（または～ヶ月）とお答えください。

＿＿＿＿年　＿＿＿＿ヶ月

3. あなたはその友人とどのくらいの頻度で会いますか。週に何回、月に何回、年に何回など大まかな頻度をお答えください。回答する際には“週・月・年”のいずれかに〇をつけ、＿ 回に数字を記入してください。

（　週　・　月　・　年　）に　＿＿＿＿＿＿回

もし、その友人とは今では違う地域に住んでいて、長期休みなどにしか会わないという場合には、右の□にチェック（✓）を記入してください　□

4. あなたはその友人と今後どのくらいの期間に渡ってつきあっていくと思いますか。以下の下線部分につきあうであろうと考えられる期間を記入してください。

＿＿＿＿　年　＿＿＿＿ヶ月

5. あなたの全ての友人と比較して、その友人はあなたにとってどれくらい大事な友人ですか。あなたの考えにもっともあてはまる数字に〇をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7
全く大事でない			平均的な友人			とても大事な友人

あなたの友人の中で、特に大事な同性の友人 5 人を想像してください。次に、その 5 人の中には入らない程度のつきあいの友人を 1 人選び、以下の友人のイニシャル欄にその人のイニシャルを記入してください。つまり、ここではほどほどのつきあいの同性の友人を 1 人選んでもらう。

友人のイニシャル：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

上でイニシャルを記入していただいた友人についてお聞きします。

6. その友人は、同じ大学に通っている人ですか？

はい　／　いいえ

7. その友人とあなたは、知り合ってから今までどれくらいのつきあいですか。以下の下線部分にその期間を記入してください。正確に覚えていない場合もおおよそでよいので～年（または～ヶ月）とお答えください。

＿＿＿＿年　＿＿＿＿ヶ月

8. あなたはその友人とどのくらいの頻度で会いますか。週に何回、月に何回、年に何回など大まかな頻度をお答えください。回答する際には“週・月・年”のいずれかに〇をつけ、＿ 回に数字を記入してください。

（　週　・　月　・　年　）に　＿＿＿＿＿＿回

もし、その友人とは今では違う地域に住んでいて、長期休みなどにしか会わないという場合には、右の□にチェック（✓）を記入してください　□

9. あなたはその友人と今後どのくらいの期間に渡ってつきあっていくと思いますか。以下の下線部分につきあうであろうと考えられる期間を記入してください。

＿＿＿＿　年　＿＿＿＿ヶ月

10. あなたの全ての友人と比較して、その友人はあなたにとってどれくらい大事な友人ですか。あなたの考えにもっともあてはまる数字に〇をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7
全く大事でない			平均的な友人			とても大事な友人

左ページにイニシャルを書いていただいた友人は、あなたにとって以下のそれぞれの面でどれくらい役に立ちますか、それとも邪魔になりますか。

「**役に立つ**」とは、友人とつきあっていることで役に立つ情報やアドバイスがもらえること、その友人が作業などを手伝ってくれること等を指します。

「**邪魔になる**」とは、その友人とつきあっていることにより時間がとられて、それぞれの面での活動や準備の時間をじゅうぶんにとれないこと等を指します。

それぞれ、「-3＝とても邪魔になる」～「+3＝とても役に立つ」のうちあなたの考えにもっともあてはまる数字に〇をつけてください（ 0 は邪魔にもならないし、役にも立たないことを意味します）。

11. 大学での学業面

-3	-2	-1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

12. サークル・クラブなどの課外活動（課外活動を行っている人のみお答えください）

-3	-2	-1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

13. 就職活動や進路選択

-3	-2	-1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

14. 人間関係（現在の関係を続けたり、新しい友人を作ったりすること）

-3	-2	-1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

15. アルバイト（今のアルバイトでうまくやること、新しいアルバイト探すこと等）

-3	-2	-1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

16. 上記の学業・課外活動・就職活動・人間関係・アルバイト以外で、あなたがもっている目標を達成するために

-3	-2	-1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

以下のシナリオの出来事が、前のページにイニシャルを記入した友人とあなたの間に起こったと考え、その時にあなたならどう感じるかをできるだけ具体的に想像しながら、シナリオを読んでください。
シナリオでは、イニシャルの友人を“Ａさん”と記述しています。

＜以下のいずれかを呈示＞

あなたは、Ａさんと遊びに行く約束をして、待ち合わせをしました。ところが、あなたはうっかりそのことを忘れてしまい、待ち合わせの場所に行きませんでした。

後日、あなたはＡさんとの約束をすっかり忘れていたことを思い出しました。

あるとき、友人たちとの会話で、その場にはいないＡさんのことが話題になりました。話の流れで、あなたもＡさんについて知っていることを話しました。

後日、あなたは、自分がＡさんの秘密まで話してしまったことに気がつきました。あなたは、会話に加わっていた友人たちがそのことでＡさんについて悪く思うことはないと確信できます。しかし、あなたはそのことについて「他の人には絶対に言わないでほしい」とＡさんから口止めされていました。

以下には、シナリオの出来事が実際に起こった時に、あなたが感じる（または感じない）かもしれない心理状態を表す文章が書かれています。**シナリオの出来事が実際に起こったとしたら、あなたはどのように感じますか。**それぞれの項目について、５段階で評定してください。

	まったく感じない		ややそう感じる		まさにそう感じる
1. 私はいい気分だ。	1	2	3	4	5
2. 私は穴があったらそれに入って消えてしまいたい。	1	2	3	4	5
3. 私は深く後悔している。	1	2	3	4	5
4. 私は自分自身に価値があると感じている。	1	2	3	4	5
5. 私は肩身がせまく感じている。	1	2	3	4	5
6. 私は自分が行ったことについてストレスを感じている。	1	2	3	4	5
7. 私は自分自身が有能で役立つと感じている。	1	2	3	4	5
8. 私は自分が悪い人間のように感じている。	1	2	3	4	5
9. 私は自分の悪い行いが、頭からはなれない。	1	2	3	4	5
10. 私は誇りを持っている。	1	2	3	4	5
11. 私は恥ずかしさや屈辱（くつじょく）を感じている。	1	2	3	4	5
12. 私は謝罪や懺悔（ざんげ）したいと感じている。	1	2	3	4	5
13. 私は自分が行ったことに対して満足している。	1	2	3	4	5
14. 私は自分自身が役立たずで無能であると感じている。	1	2	3	4	5
15. 私は自分が行ったことを悪いことだと感じている。	1	2	3	4	5

あなたがＡさんに対して前のページのシナリオに書かれていたようなことをしたと気づいた時、以下のような用事があったと考えてください。あなたはそれぞれの用事をキャンセルして、すぐにＡさんのところへ謝りに行こうと思いますか？それとも用事を済ませて、後日謝ることにしますか？　以下の 1 から 4 の数字のうち、あなたの考えにもっとも近い数字に〇印をつけてください。

1：ほぼ確実に、用事を済ませてから後日謝りに行く
2：おそらく、用事を済ませてから後日謝りに行く
3：おそらく、用事をキャンセルしてすぐに謝りに行く
4：ほぼ確実に、用事をキャンセルしてすぐに謝りに行く

① あなたはその日、大好きなアーティストのコンサートに行くことになっています。すぐにＡさんに謝りに行くとそのコンサートには間に合いません。

（後日行く）　1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4　（すぐに行く）

② あなたはその日、現在遠いところに住んでいる家族のひとりが近くに来るので、一緒にご飯を食べに行く約束をしていました。すぐにＡさんに謝りに行けば、その家族とご飯を食べに行く時間がなくなります。

（後日行く）　1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4　（すぐに行く）

③ あなたはその日、大学で健康診断を受けることになっていました。その日大学で受診できない場合は、一般の病院で自費で受診しなければなりません。すぐにＡさんに謝りに行くためには、大学の無料の健康診断を受けることを諦めなければなりません。

（後日行く）　1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4　（すぐに行く）

④ あなたはその日、別の同性の友人から悩み事があるので相談にのってほしいと頼まれていました。すぐにＡさんに謝りに行けば、その友人からの頼みを断ることになります。

（後日行く）　1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4　（すぐに行く）

⑤ あなたはその日、アルバイトが入っていました。すぐにＡさんに謝りに行くと、アルバイトに遅刻してしまいます。遅刻すると、その分のアルバイト代は支払われません。

（後日行く）　1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4　（すぐに行く）

⑥ あなたはその日、恋人と一緒に映画を観に行く予定でした。すぐにＡさんに謝りに行けば、その日に映画を観に行くのは諦めなければいけません。

（後日行く）　1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4　（すぐに行く）

シナリオのようなことが実際に起こったとすると、Ａさんはどのように感じるでしょうか。以下の質問について、あなたの予想に一番近い数字に〇をつけてください。

(i) シナリオの出来事は、Ａさんのあなたに対する信頼をどれくらい損なうと思いますか。

1	2	3	4
全く信頼を損なわない	少し信頼を損なう	かなり信頼を損なう	完全に信頼を損なう

(ii) あなたが自分の失敗に気づかずに、Ａさんに謝らないままだとしたら、Ａさんがあなたとのつきあいをやめようとする可能性はどれくらいあると思いますか。

1	2	3	4
その可能性は全くない	多少その可能性がある	かなりその可能性がある	絶対にあなたとのつきあいをやめる

(iii) あなたがこの出来事についてＡさんに謝らないとしても、Ａさんはあなたを許してくれるでしょうか。

1	2	3	4
絶対に許してくれない	多分許してくれない	多分許してくれる	絶対に許してくれる

(iv) あなたがきちんと謝れば、Ａさんはあなたを許してくれるでしょうか。

1	2	3	4
絶対に許してくれない	多分許してくれない	多分許してくれる	絶対に許してくれる

シナリオの出来事が実際にＡさんとの間に起こったとしたら、あなたはどのようにそれに対処しますか。簡単でよいので、あなたが実際にすると思うことを以下の自由記述欄に書いてください。

（自由記述欄）

以下のシナリオの出来事が、前のページにイニシャルを記入した友人とあなたの間に起こったと考え、その時にあなたならどう感じるかをできるだけ具体的に想像しながら、シナリオを読んでください。
シナリオでは、イニシャルの友人を“Ａさん”と記述しています。

＜以下のいずれかを呈示＞

あなたはＡさんと朝から待ち合わせをしていました。しかし、その前の晩におもしろいテレビ番組があり、夜ふかしをしたために、あなたは寝坊してしまいました。あなたは慌ててメールを入れて待ち合わせ場所に行きました。しかし、結局、Ａさんを１時間ほど待たせることになってしまいました。

あなたはＡさんから本を借りました。その本は、すでに廃刊になっている本で、Ａさんはそれをインターネット・オークションでたまたまみつけて 1000 円で購入したそうです。自分の家でその本を読んでいたときに、あなたはうっかりその本に炭酸飲料をこぼしてしまいました。その本はベタベタして、もう読むことができなくなりました。

あなたがＡさんに対して前のページのシナリオに書かれていたようなことをしたとします。そのとき、あなたは以下のようなことをどれくらいすると思いますか。あなたの考えにもっともよくあてはまる数字に○印をつけてください。

1～4 の数字はそれぞれ以下のことを意味します。

1：絶対にそうしない
2：多分そうしない
3：多分そうする
4：絶対にそうする

① 相手に「ごめんなさい／ごめんね」等と言葉にして謝る

（絶対にそうしない）　**1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4**　（絶対にそうする）

② おわびに、相手にお昼ご飯やおやつをおごると申し出る

（絶対にそうしない）　**1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4**　（絶対にそうする）

③ Ａさんになぜ朝寝坊したのか説明する

（絶対にそうしない）　**1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4**　（絶対にそうする）

④ おわびに、Ａさんに後日何かプレゼントをする

（絶対にそうしない）　**1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4**　（絶対にそうする）

⑤ 寝坊したことについて、相手の前で自分のことを茶化（ちゃか）したり、卑下（ひげ）したりする。

（絶対にそうしない）　**1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4**　（絶対にそうする）

⑥ 寝坊したことについて、Ａさんの前で恥ずかしそうに（ばつが悪そうに）する。

（絶対にそうしない）　**1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4**　（絶対にそうする）

⑦ Ａさんに遅刻するという連絡をした後、タクシーで待ち合わせの場所に行けば、2000 円ほどかかりますが、待ち合わせの時間に間に合いそうだということに気づきました。あなたは、タクシーを使いますか？

（絶対にそうしない）　**1 － － － － 2 － － － － 3 － － － － 4**　（絶対にそうする）

最近の出来事のうち、**主にあなたの責任で誰かを怒らせた**出来事を思い出してください。あなたは、このような出来事についていくつか思い当たるかもしれません。そのうち、相手が家族のもの・相手が全く見ず知らずの相手のものは除いてください。つまり、ここではあなたが、**友人、恋人、友人ではないが定期的につきあいのあった相手（学校の先生、アルバイト先の上司など）**を怒らせた出来事を思い出してください（現在はその相手とのつきあいが途絶えていてもかまいません）。できるだけ1年以内に起きたもので、印象深いものを選んでください。その出来事はどのような出来事でしたか？　以下の欄に簡単に説明してください。

記入する際には、プライバシー保護のために、固有名詞はイニシャルにするなどして、個人を特定可能な情報を含めないようにしてください。

あなたが「**何をした**」ために、「**どのような結果**」になって相手が怒ったのかを簡単に書いてください。ただし、赤字の部分（「何をした」か、「どのような結果」になったか）については具体的に書いてください。

1. 上記の出来事についておうかがいします。
それは何ヶ月前（または何年前）に起こりましたか？　おおよそでかまいません。

＿＿＿＿＿＿＿年　＿＿＿＿＿＿ヶ月前

その時、あなたは自分の過失をどれくらい深刻なものだと思いましたか。

1	2	3	4
全く深刻でない	少し深刻	かなり深刻	とても深刻

2. 左記の出来事であなたが怒らせた相手との関係についておうかがいします。

その相手は、あなたと当時どのような関係にあった相手ですか？　以下の a～d の中から当てはまるものに〇をつけて下さい。
その他（c）を選んだ場合は、簡単に関係について説明してください。

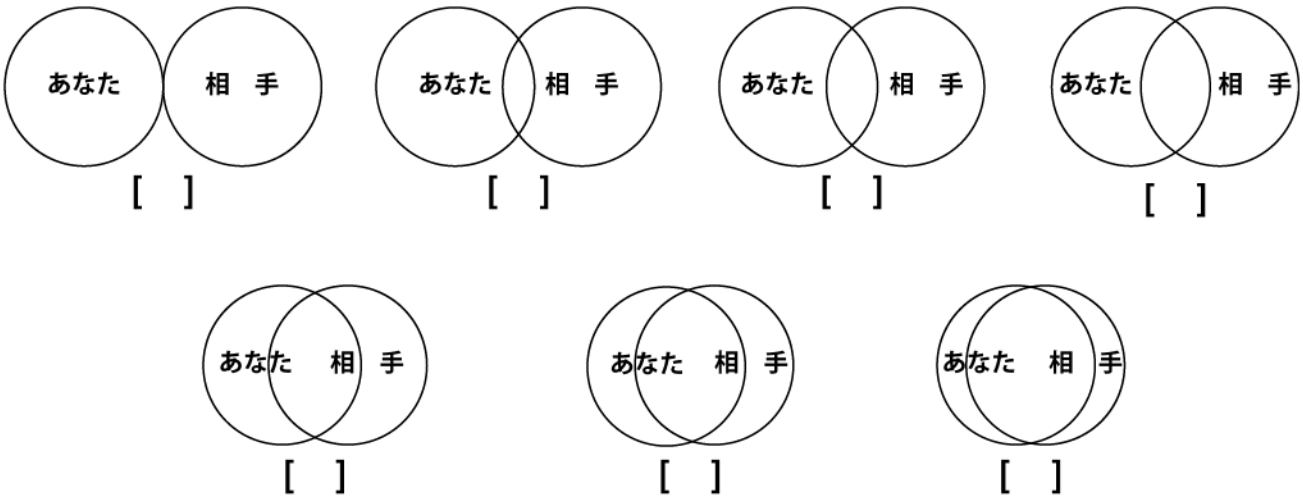
a. **親友**　　b. **普通の友人**　　c. **恋人**

d. **その他の知り合い**＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

その相手とあなたは、**その出来事が起こる前まで**にどれくらいの間つきあいがありましたか？　正確に覚えていない場合もおおよそでよいので～年（または、～ヶ月）とお答えください。

＿＿＿＿＿＿**年**　＿＿＿＿＿＿**ヶ月**

その出来事が起こる前のあなたと相手との関係性を最もよく表しているのは下の図のうちどれですか。その図の下の[　]内に✓をつけてください。



4. その出来事が起こったとき（あなたが謝ったりする前に）、相手はどのように感じたでしょうか。以下の質問について、あなたの予想に一番近い数字に〇をつけてください。

(i) （あなたが謝ったりする前に）その出来事は、相手のあなたに対する信頼をどれくらい損ないましたか。

1	2	3	4
全く信頼を損なわなかった	少し信頼を損なった	かなり信頼を損なった	完全に信頼を損なった

(ii) （あなたが謝ったりする前に）相手はどれくらいあなたに腹を立てていましたか。

1	2	3	4
全く腹をたていなかった	少し腹をたてていた	かなり腹をたてていた	完全に腹をたてていた

(iii) （あなたが謝ったりする前に）その出来事は相手をどれくらいイライラさせましたか。

1	2	3	4
全くイライラさせなかった	少しイライラさせた	かなりイライラさせた	とてもイライラさせた

(iv) （あなたが謝ったりする前に）その出来事によって、相手はあなたとのつきあいをやめようと思ったでしょうか。

1	2	3	4
その可能性は全くない	多少その可能性がある	かなりその可能性がある	絶対にあなたとのつきあいをやめようと思った

(v) その出来事について、あなたが謝るなど何もしなかったとしても、相手はあなたを許してくれたでしょうか。

1	2	3	4
絶対に許してくれない	多分許してくれない	多分許してくれる	絶対に許してくれる

5. その出来事が起こった時に、あなたが感じたかもしれない心理状態を表す文章が書かれています。その出来事が起こった時に、あなたがどのように感じたかを5段階で評定してください。

	全くそう感じない		ややそう感じる		まさにそう感じる
1. 私は穴があったらそれに入って消えてしまいたかった。	1	2	3	4	5
2. 私は深く後悔した。	1	2	3	4	5
3. 私は肩身がせまく感じた。	1	2	3	4	5
4. 私は自分が行ったことについてストレスを感じた。	1	2	3	4	5
5. 私は自分が悪い人間のように感じた。	1	2	3	4	5
6. 私は自分の悪い行いが、頭からはなれなかった。	1	2	3	4	5
7. 私は恥ずかしさや屈辱（くつじょく）を感じた。	1	2	3	4	5
8. 私は謝罪や懺悔（ざんげ）したいと感じた。	1	2	3	4	5
9. 私は自分自身が役立たずで無能であると感じた。	1	2	3	4	5
10. 私は自分が行ったことを悪いことだと感じた。	1	2	3	4	5
11. 私は相手に対して申しわけなく感じた。	1	2	3	4	5
12. 私は自分の行ったことに罪悪感を感じた。	1	2	3	4	5

6. その出来事が起こった後、あなたは以下の 7 つのことをしましたか？　それぞれについて、「a. した」、「b. しなかった」、「c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない」の 3 つから適当なものを選んでください。

① 相手に「ごめんなさい／ごめんね」等と言葉にして謝った

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

② おわびに、相手にお昼ご飯やおやつ等、何かをおごった（おごると申し出た）

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

③ 相手になぜその出来事が起こったのか説明した

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

④ おわびに相手に何かプレゼントをしたり、弁償・補償をした（弁償・補償を申し出た）

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

⑤ それを起こしたことについて、相手の前で自分のことを茶化（ちゃか）したり、卑下（ひげ）したりした。

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

⑥ それを起こしたことについて、相手の前で恥ずかしそうに（ばつが悪そうに）した。

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

⑦ 相手の被害・ダメージを回復しようとつとめた。または、相手がそうするのを手伝った（手伝うと申し出た）？

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

以上のこと以外に、あなたが特に相手に許してもらうためにしたことがあれば、以下の欄に簡単に説明してください。

次のページに最後の質問があります

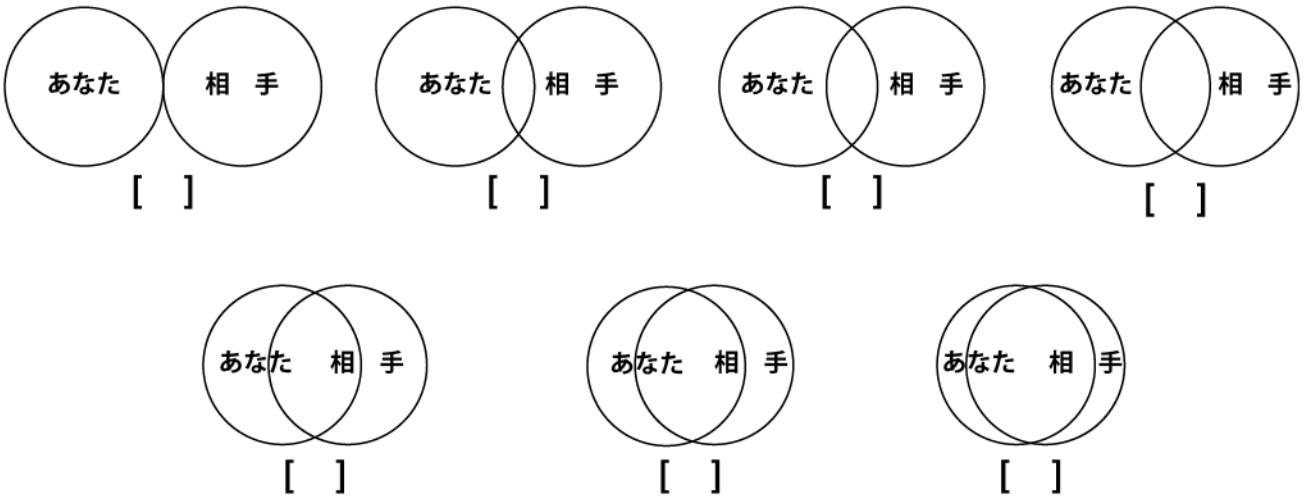
7. 相手とあなたの現在の関係性は、どのようなものですか。以下の a～e からあてはまるものをひとつ選んでください。もし e の「つきあいなし」を選ぶ場合には、つきあいがなくなったのが、ここで回答した出来事が直接・間接の理由となったかどうかもお答えください。　この出来事が理由となってつきあいがなくなった場合は、右側の□に✓マークを記入しておいてください。

a. **親友**　　b. **普通の友人**　　c. **恋人**

d. **その他の知り合い**＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

e. **つきあいなし**　　**この出来事がきっかけでつきあいがなくなった** □

9. 現時点でのあなたと相手との関係性を最もよく表しているのは下の図のうちどれですか。図の下の[　]内に✓をつけてください。



最近の出来事のうち、<u>誰かを怒らせた</u>出来事についておうかがいします。あなたは、このような出来事についていくつか思い出すかもしれません。そのうち、友人（親しさの程度は問いません）または恋人を怒らせた出来事を思い出してください（現在はその相手とのつきあいが途絶えていてもかまいません）。できるだけ１年以内に起きたもので、印象深いものを選んでください。その出来事はどのような出来事でしたか？　以下の欄に簡単に説明してください。

記入する際には、プライバシー保護のために、固有名詞はイニシャルにするなどして、個人を特定可能な情報を含めないようにしてください。

あなたが「何をした」ために、「どのような結果」になって相手が怒ったのかを簡単に書いてください。

1. 上記の出来事についておうかがいします。
それは何ヶ月前（または何年前）に起こりましたか？　おおよそでかまいません。

_____年　_____ヶ月前

あなたと相手のどちらにどれくらい過失があったと思いますか。以下の割合のうち、あなたの考えにもっとも近い割合の下の[　]に✓をつけて下さい。

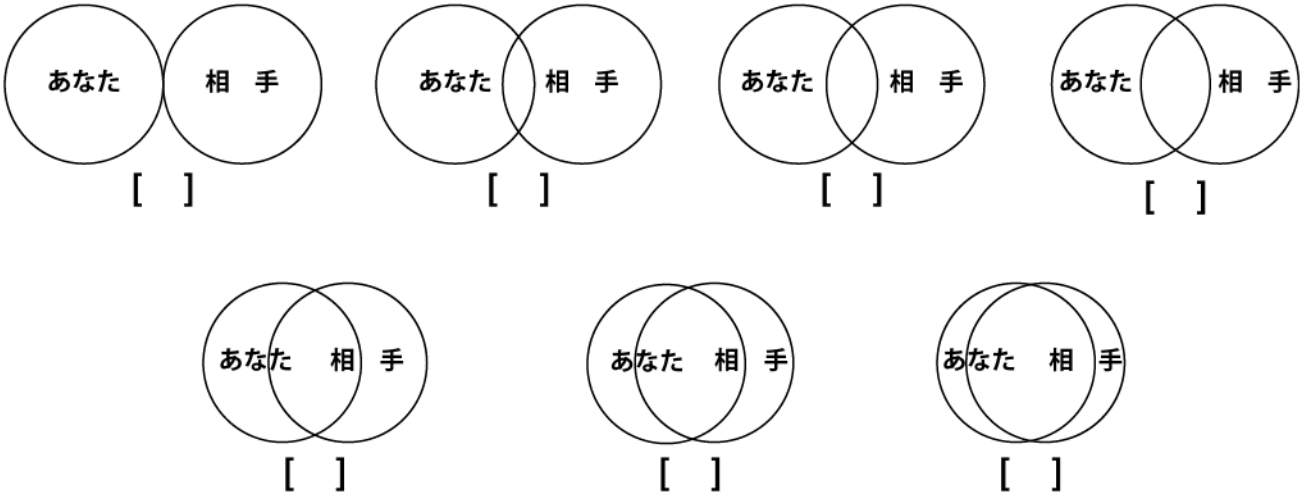
あなたの責任	100%	90%	80%	70%	60%	50%	40%	30%	20%	10%	0%
相手の責任	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]
	⇧ **完全にあなたに責任があった**					⇧ **あなたと相手の責任は同じくらい**					⇧ **完全に相手に責任があった**

2. 左記の出来事であなたが怒らせた相手との関係についておうかがいします。
その相手とあなたとの関係に当てはまるものに〇をつけてください。

a. **同性の友人**　　b. **異性の友人**　　c. **恋人**

d. **その他**（具体的に書いてください＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

その出来事が起こる前のあなたと相手との関係性を最もよく表しているのは下の図のうちどれですか。その図の下の[　]に✓をつけてください。



3. **その出来事が起こったとき（あなたが謝ったりする前に）**、相手はどのように感じたでしょうか。以下の質問について、あなたの予想に一番近い数字に〇をつけてください。

(i)　（あなたが謝ったりする前に）その出来事は、相手のあなたに対する信頼をどれくらい損ないましたか。

1	2	3	4
全く信頼を損なわなかった	少し信頼を損なった	かなり信頼を損なった	完全に信頼を損なった

(ii)　（あなたが謝ったりする前に）その出来事によって、相手はあなたとのつきあいをやめようと思ったでしょうか。

1	2	3	4
その可能性は全くない	多少その可能性がある	かなりその可能性がある	絶対にあなたとのつきあいをやめようと思った

(iii)　その出来事について、あなたが謝るなど何もしなかったとしても、相手はあなたを許してくれたでしょうか。

1	2	3	4
絶対に許してくれない	多分許してくれない	多分許してくれる	絶対に許してくれる

5. その出来事が起こった後、あなたは以下の 7 つのことをしましたか？　それぞれについて、「a. した」、「b. しなかった」、「c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない」の 3 つから適当なものを選んで〇をつけてください。

① 相手に「ごめんなさい／ごめんね」等と言葉にして謝った

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

② おわびに、相手にお昼ご飯やおやつ等、何かをおごった（おごると申し出た）

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

③ 相手になぜその出来事が起こったのか説明した

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

④ おわびに相手に何かプレゼントをしたり、弁償・補償をした（弁償・補償を申し出た）

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

⑤ それを起こしたことについて、相手の前で自分のことを茶化（ちゃか）したり、卑下（ひげ）したりした。

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

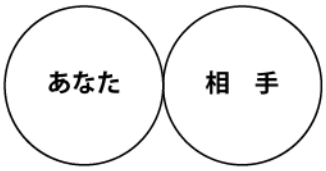
⑥ それを起こしたことについて、相手の前で恥ずかしそうに（ばつが悪そうに）した。

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

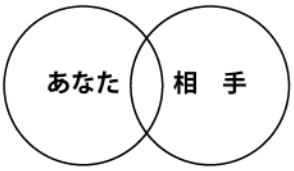
⑦ 相手の被害・ダメージを回復しようとつとめた。または、相手がそうするのを手伝った（手伝うと申し出た）？

a. した　　b. しなかった　　c. しなかったけれど場合によってはしたかもしれない

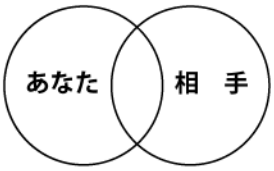
6. 現時点でのあなたと相手との関係性を最もよく表しているのは下の図のうちどれですか。図の下の[　]内に✓をつけてください。



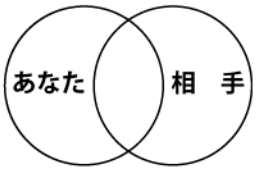
[　]



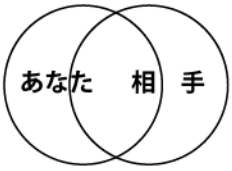
[　]



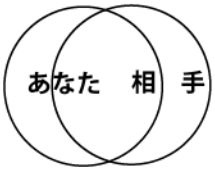
[　]



[　]



[　]



[　]

[　]

あなたの友人の中で、特に大事な同性の友人５人を想像してください。次に、その５人の中には入らない程度のつきあいの友人を１人選び、以下の友人のイニシャル欄にその人のイニシャルを記入してください。つまり、ここでは今後親しくなりそうな同性の友人を１人選んでもらう。

友人のイニシャル：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

上でイニシャルを記入していただいた友人についてお聞きします。

17. その友人は、同じ大学に通っている人ですか？

はい　／　いいえ

18. その友人とあなたは、知り合ってから今までどれくらいのつきあいですか。以下の下線部分にその期間を記入してください。正確に覚えていない場合もおおよそでよいので～年（または～ヶ月）とお答えください。

＿＿＿＿年　＿＿＿＿ヶ月

19. あなたはその友人とどのくらいの頻度で会いますか。週に何回、月に何回、年に何回など大まかな頻度をお答えください。回答する際には“週・月・年”のいずれかに○をつけ、＿ 回に数字を記入してください。

（　週　・　月　・　年　）に　＿＿＿＿＿＿回

もし、その友人とは今では違う地域に住んでいて、長期休みなどにしか会わないという場合には、右の□にチェック（✓）を記入してください　□

20. あなたはその友人と今後どのくらいの期間に渡ってつきあっていくと思いますか。以下の下線部分につきあうであろうと考えられる期間を記入してください。

＿＿＿＿　年　＿＿＿＿ヶ月

21. あなたの全ての友人と比較して、その友人はあなたにとってどれくらい大事な友人ですか。あなたの考えにもっともあてはまる数字に○をつけてください。

1	2	3	4	5	6	7
全く大事でない			平均的な友人			とても大事な友人

以下のシナリオの出来事が、前のページにイニシャルを記入した友人とあなたの間に起こったと考え、その時にあなたならどう感じるかをできるだけ具体的に想像しながら、シナリオを読んでください。
シナリオでは、イニシャルの友人を“Ａさん”と記述しています。

あなたは、Ａさんと遊びに行く約束をして、待ち合わせをしました。ところが、あなたはうっかりそのことを忘れてしまい、待ち合わせの場所に行きませんでした。

後日、あなたはＡさんとの約束をすっかり忘れていたことを思い出しました。

あなたが最近、特定の誰か（友人・恋人・配偶者・家族・職場の同僚，上司，部下・その他知り合い等）をネガティブな気持ちにしてしまった出来事（悲しませた、怒らせた、傷つけた、怖がらせた等）をひとつ思い出してください。

その出来事についての簡単な説明を書いてください。
どのような状況で、あなたは何をして、その結果どうなったのか、具体的に記述してください。個人が特定できるような情報（相手の名前など）は含めないでください。

その出来事は、今からどれくらい前に起こったことですか？　数字を下線部に記入し、あてはまる単位（日・週・月・年）に〇をつけてください。正確に覚えていない場合は、おおよそでかまいません。

_____日・週・月・年　前

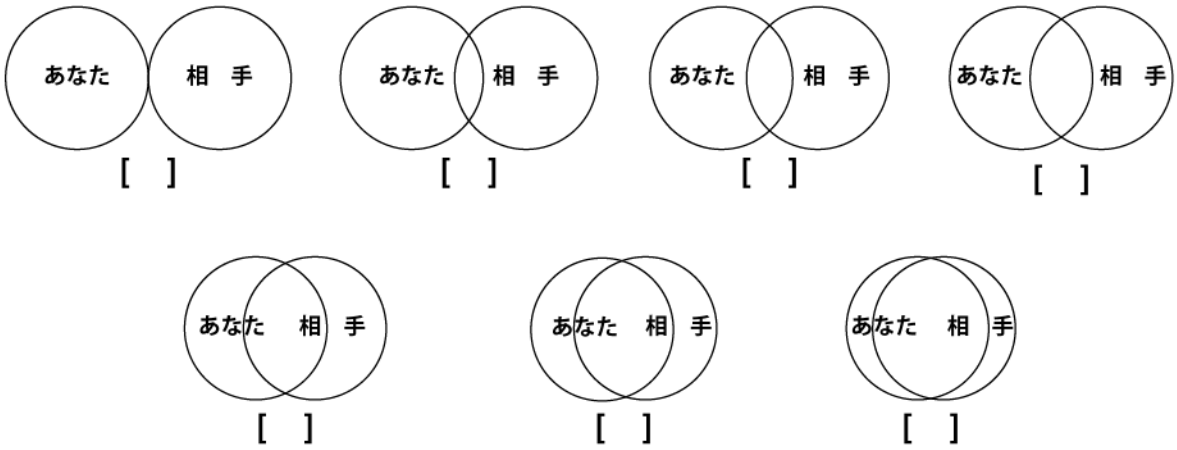
その出来事についておうかがいします。当てはまる方に〇をつけてください。

あなたは相手のことを、意図的に、ネガティブな気持ちにした	はい　いいえ
相手をネガティブな気持ちにしたのは、あなたの衝動的な言葉や行動だった	はい　いいえ
あなたは事前に、自分の行動によって相手がネガティブな気持ちになることをわかっていた	わかっていた わかっていなかった
あなたは、相手をネガティブな気持ちにしたくないと思えば、自分の意志でその時の自分の言動を変えることができた	できた　できなかった

その出来事が起こった時、その相手とあなたとの関係はどのようなものでしたか？　当てはまるもののアルファベットに〇をつけてください。

a. 友人　　b. 恋人　　c. 配偶者
d. 家族
e. 職場の同僚　　f. 職場の上司　　g. 職場の部下
h. その他（簡単に説明して下さい：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

その出来事が起こる前のあなたと相手の関係性をもっともよく表しているのは、下の図のうちどれですか？　もっともよくあてはまる図の下の[　]に〇をつけて下さい。



その出来事で、**相手がどんな気持ちになった**とあなたは思いましたか？　相手が感じていた感情を以下の中から選んでください。相手が複数の感情を感じていたと思う時は、当てはまるすべての感情にチェックしてください。項目にない感情があった場合は、“その他”を選び、その感情について簡単に記述してください。

- ☐ 悲しみ
- ☐ 怒り
- ☐ 恐怖
- ☐ 苦しみ
- ☐ 軽蔑
- ☐ 嫉妬（男女間の関係で感じられるジェラシーのことです）
- ☐ ねたみ（自分より良い状態にある相手をねたましく思うことです）
- ☐ 不公平感
- ☐ その他（____）

＜上記の質問で回答者がチェックしたものについて以下の質問を提示してください。＞

相手は、それぞれの感情をどれくらい強く感じていたでしょうか？　当てはまる数字を選んでください。

悲しみ

1	2	3	4	5
ほんの少しだけ感じていた	やや感じていた	感じていた	強く感じていた	とても強く感じていた

怒り

1	2	3	4	5
ほんの少しだけ感じていた	やや感じていた	感じていた	強く感じていた	とても強く感じていた

恐怖

1	2	3	4	5
ほんの少しだけ感じていた	やや感じていた	感じていた	強く感じていた	とても強く感じていた

苦しみ

1	2	3	4	5
ほんの少しだけ感じていた	やや感じていた	感じていた	強く感じていた	とても強く感じていた

軽蔑

1	2	3	4	5
ほんの少しだけ感じていた	やや感じていた	感じていた	強く感じていた	とても強く感じていた

嫉妬（男女間の関係で感じられるジェラシーのことです）

1	2	3	4	5
ほんの少しだけ感じていた	やや感じていた	感じていた	強く感じていた	とても強く感じていた

ねたみ（自分より良い状態にある相手をねたましく思うことです）

1	2	3	4	5
ほんの少しだけ感じていた	やや感じていた	感じていた	強く感じていた	とても強く感じていた

不公平感

1	2	3	4	5
ほんの少しだけ感じていた	やや感じていた	感じていた	強く感じていた	とても強く感じていた

その他として回答者が記述した感情

1	2	3	4	5
ほんの少しだけ感じていた	やや感じていた	感じていた	強く感じていた	とても強く感じていた

そのときの**あなた自身の気持ち**についてお聞きします。それぞれの感情をどれくらい強く感じていましたか？　5 段階（1＝全く感じていなかった～5＝とても強く感じていた）で評定してください。

	全く感じていなかった	あまり感じていなかった	どちらともいえない	感じていた	とても強く感じていた
（相手に対する）共感	1	2	3	4	5
苛立った	1	2	3	4	5
いい気分	1	2	3	4	5
穴があったらそれに入って消えてしまいたい	1	2	3	4	5
深い後悔	1	2	3	4	5
（相手が）かわいそう	1	2	3	4	5
自分に価値がある	1	2	3	4	5
肩身が狭い	1	2	3	4	5
自分が行ったことへのストレス	1	2	3	4	5
（相手に対する）同情	1	2	3	4	5
腹立たしい	1	2	3	4	5
自分は悪い人間だ	1	2	3	4	5
悪い行いが頭からはなれない	1	2	3	4	5
（相手に対して）あたたかな気持ち	1	2	3	4	5
誇り	1	2	3	4	5
恥ずかしさや屈辱（くつじょく）	1	2	3	4	5
謝罪や懺悔（ざんげ）したい	1	2	3	4	5
（相手に対して）優しい気持ち	1	2	3	4	5
怒った	1	2	3	4	5
自分は役立たずで無能だ	1	2	3	4	5
自分が行ったことは悪いことだ	1	2	3	4	5
（相手に対して）親密な気持ち	1	2	3	4	5

その出来事があった後、あなたは以下にあげるそれぞれの行動をとりましたか？あなたが行ったことすべてにチェックをしてください。

- □ 相手に対して身体的な接触をした（または、接触をしようとした）
- □ 相手とコミュニケーションをとった
- □ 相手へ恥入っている様子を見せた
- □ 相手に後悔していると伝えた
- □ 相手へ自責の念を示した
- □ 相手に対して従順で、言葉数も少なくした
- □ 相手へ謙虚な態度を示した
- □ 相手に謝罪した
- □ 相手へプレゼントや援助を申し入れた（例：食べ物、何かの手伝い）
- □ 相手の状況に気を配った（例：相手のニーズに応えた）
- □ 相手との関係を心配するようにした
- □ 相手のダメージ／被害を修復しようとした
- □ 相手に許してもらえるか尋ねた
- □ 意図的に相手をネガティブな気持ちにしたわけではないことを説明した
- □ 相手へ、気恥ずかしい、ばつが悪そうな様子を示した
- □ 自分が信頼できる人間であることを相手に納得させようとした
- □ 相手へ礼儀正しさを示した
- □ 相手に対して、そのことについて自分のことを茶化したり、卑下したりした
- □ 相手を励ました
- □ 相手をなぐさめた
- □ 自分の行動を正当化した
- □ 相手とできるだけ顔を会わせないようにした
- □ 自分の言い訳が本当だと思い込むようにした
- □ その出来事について考えないようにした
- □ 相手にも責任がないか疑ったり確認したりした
- □ その出来事についてあれこれ悩んだ
- □ 相手に申し訳なくて泣いた
- □ 神仏に祈った

その出来事があった後、あなたが相手に対してとった行動のうち、特にあなたが大事だと思う行動は何ですか？　先にチェックしたものも含めて、あなたが特に大事だと思う行動を簡単に説明してください。

以下の 2 つ質問は、あなたが謝らなかった場合、謝った場合についてうかがいます。**あなた自身が実際に相手に謝ったかどうかによらず**、もしそうだったら相手はあなたを許してくれたと思うかどうかをお答えください。もし、実際に謝っていない・謝った場合は、実際の相手の反応を答えてください。

その出来事について、あなたが謝るなど何もしなかったとしても、相手はあなたを許してくれたでしょうか？

1	2	3	4
絶対に許してくれない	多分許してくれない	多分許してくれる	絶対に許してくれる

その出来事について、あなたがきちんと謝っていたら、相手はあなたを許してくれたでしょうか？

1	2	3	4
絶対に許してくれない	多分許してくれない	多分許してくれる	絶対に許してくれる

その出来事が起こる前の、あなたと相手の関係についておうかがいします。その相手はあなたにとって、以下のそれぞれの面でどれくらい役に立つ（それとも、邪魔になる）相手でしたか？

○「役に立つ」とは、その相手とつきあっていることで役に立つ情報やアドバイスがもらえること、相手が作業などを手伝ってくれること等を指します。

×「邪魔になる」とは、その相手とつきあっていることにより時間がとられて、それぞれの面での活動や準備の時間を十分にとれないこと等を指します。

それぞれ、「-3＝とても邪魔になる」～「+3＝とても役に立つ」のうちあなたの考えにもっともあてはまる数字に○をつけてください。“0”は、それぞれの面でその相手が邪魔にもならないし、役にも立たないことを意味します。

22. 仕事での成功（昇進・昇級・転職など）

−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

□ 仕事をしていなかった

23. 副業での成功（今のアルバイトでうまくやること、新しいアルバイトを探すことなど）

−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

□ 副業はしていなかった

24. あなた個人の趣味

−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

□ 趣味はない

25. サークルや教室、ボランティア活動など

−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

□ 課外活動はしていなかった

26. 人間関係（現在の関係を続けたり、新しい友人を作ったりすること）

−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

27. 恋愛関係（新しい恋人を探したり、結婚のための活動をすること）

−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

□ 既に結婚をしていた／婚約をしていた

28. 家族関係（あなたの家庭を円満に維持したりすること）

−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

29. 上記のことがら以外で、あなたがもっている目標を達成するために

−3	−2	−1	0	+1	+2	+3
とても邪魔になる		少しだけ邪魔になる		少しだけ役に立つ		とても役に立つ

その出来事について、あなたと相手のどちらにそれぞれどれくらい責任があったと思いますか？　あなたの考えにもっとも近い割合にチェックをつけてください。

あなたの責任	100%	90%	80%	70%	60%	50%	40%	30%	20%	10%	0%
相手の責任	0%	10%	20%	30%	40%	50%	60%	70%	80%	90%	100%
	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]	[　]
	⇧ 完全にあなたに責任があった					⇧ あなたと相手の責任は同じくらい					⇧ 完全に相手に責任があった

謝辞

本研究に際して，丁寧かつ熱心なご指導を頂きました大坪庸介准教授に深謝いたします。また様々な観点から的確な助言を賜りました，喜多伸一教授，長坂一郎教授，石井敬子准教授，野口泰基准教授に厚く御礼申し上げます。

データ収集にあたり，質問紙の配布に快くご協力してくださいました，菅さやか先生，高石浩一先生，中西大輔先生，増地あゆみ先生，三船恒裕先生，森久美子先生，山浦一保先生，さらに，貴重な時間を割いて質問紙の回答にご協力していただいた皆様に，心から感謝いたします。

また，質問紙作成にご協力いただいた小宮あすか准教授，Adam Smith さん，実験・調査の実施にあたり大変お世話になりました鈴木恵美さん，小切麻美さん，中村豪馬さんに，感謝の意を表します。

そして末筆になりましたが，ゼミや個人的な相談を通して本研究に様々なアイデアを与えてくださった研究室の皆さま，研究を続けることについて支援してくれた家族に，感謝します。

八木 彩乃